
Our place

朝比奈 龍希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Our place

【Zコード】

Z7531S

【作者名】

朝比奈 龍希

【あらすじ】

あたしは、家族友人に恵まれなかつた。友人の出した自殺予告メールを受け取り、車で友人宅に向かう最中ダンプにオカマを掘られ、車は空を舞つてあたしは死んだ。気付くと不思議な空間にいて美少年天使が待つていて、ほぼ強制的に転生させられた。転生先は宇宙船や魔法が平氣で存在する世界。そこであたしはナツキ・ルウイン・アマハと言う名の娘になつて、父は宇宙考古学者と、母は魔法界の女帝と謳われ、兄は美形さんでシスコン街道まつしぐらになりつつある。そんな美形家族の一員になつた。ラグナリア星で女王様即位

5年記念の夜会へ行つた際、私は拉致された上殺されそうになる。そこに現れたのは、一人の少年と女王陛下だった。

その事件の10年後、私はジュラーレ魔法学院へ入学する前日、母親達の目論みにより、第一皇位継承者のカグラとの婚約発表に驚きながらも入学されられる。その学院には婚約者もいる状況で…魔法で肉体を中性体とし、名前も一部変えて…。

親達の思惑通りに恋に落ちるか？ はたまた、他の男性と恋に落ちるか？ 前途多難な学院生活の開幕です！

「んなの求めてないからー」（前書き）

SFモノが書きたい！でも魔法も使いたい！と言つかなり無茶な構想の中で作つております。

目指すSFの個人的王道はスタートレボイジャーです。ファンタジーに関しては色々有り過ぎて何でもござれな感じです。プラス仕事上の観念も取り入れて物語を作つております。のつけはかなりダークです。ごめんなさい。（――（・・・）――（・・・）ペコペコ

「んなの求めてないから！」

「…………」

「これで何度田だらうか？」

あたしは携帯のディスプレイに出された、トモダチのアイツからのメールに絶句した。

もう、疲れた。これから死ぬね。

「またあ？！」「レなの？」

一度田は、電話で告げられて。
しかも自殺の仕方が杜撰過ぎて、笑いを通り越して呆れた。

真冬で洗面器にお湯を張つて、手首を切つてそこに浸けたと言つ。
・・・・まぬけつぱり。真冬ダヨ？お湯なんか直ぐに冷水になつてしまふのが解らないなんてありえねえヨ！

次にかましたのが、切つた手首をストーブの前に置いて・・・。
・血が固まるじゃん！なに考へてるのよ？このヒトは！って正直トモダチやってるのが嫌になつた。

実際、大した流血量でもなくて、自分が間違つて親指にカッターナイフをぶつ刺した時なんか、刺した瞬間、指を口の中に咥えて、洗面台に走つたよ！あの時はビビッた。洗面台が血の海だつたよ！
その上、結構な流血量だったので眩暈がした位だし、3分は血が止まるまで放置するしか無かつたらから大変だつたけ。
そんくらいい血を流して見やがれ！大変なんだぞ！痛いんだぞ！

その上、アイツは親兄弟友達に甘えまくり。羨ましいを通り越して腹立たしい。言ひちゃあ悪いが、あたしの家はマトモじやない。

あたしと父親の殴り合いのケンカは日常的にあり、母親はどつかおかしい。あたしの一つ下の子を墮胎して水子じやないとたまう。ばーちゃん、じーちゃん、育て方間違え過ぎだよ！と泣き付きたくても、小学校の時に死んでどうにもならない。

死ぬたくなつたのなんか、星の数ほどあるんじやないかつて位だ。親を惨殺してしまいたくなつたのだつてある。理不尽な暴力や言い分には、何度となく嫌な気にさせられた。

でも、あたしはそれを実行しなかつた。

あたしの周囲には命の儂さを見せ付けられる現実があつたから。小学生で退院したら遊ぼうつて言つていた男の子は、白血病で呆気なく死んだ。

3つ下の近所の女の子は、車に撥ねられて口から泡と血を流して即死した。

ばーちゃんは、心臓発作で突然死んだ。

流石にあの時はめちゃくちゃ悲しくて人のいない所で泣き叫んだ。自分の命あげるから返してって。

誰よりもあたしに愛情をくれた人を助けたかったし、置いていかれたくなかつた。

でも現実なんて非情でしかない。

生きたいのに生きられない人が沢山いるけれど、反対に命を粗末にする人が山ほどいる。

あたし、隠し事は好きじゃないから、自分の事を話していたのにも関わらず、アイツは命を軽んじる。マジで悔しかった。

あたしの思いを踏みにじられまくつていて「気分転換に何時でも付き合うし、苦しい時は誰だつてあるから、話まくつて解決しよ」って言つたのに・・・・・こんなオチ。

あんまりだつ！

「仕方ない、行くか」

溜め息一つ吐きつつ、あたしは車のキーとバックを持って家を出る。

あたしのエゴだつて解つている。

何度も駆けつけたつて、アイツの心には響かないし、届かない。

でも、自分と関わりがある状態で死なれるのはたまらなく嫌だつた。

きっと、自分と関わりが無くなつてアイツが死を選んだとしても、あたしは気付かないでいるだつ。知らされなければ分からずに生きていられるから。

だって、そうなれば、自分の気持ちを搔き乱されなくてすむから。平穀な毎日じやないから、これ以上気持ちをざわつかせたいとは思わない。

せめてトモダチと一緒にいる時は、わいのわいのして日常の鬱積から離れていたいものなのにこんな状況嬉しくない。

気分転換にロックな曲をかけて、トモダチの家へ向かう。また大した手首の切り方じゃないのや、睡眠薬の飲み過ぎくらいだろう事は分かつてゐる。

殺してやるとか、怨んでやるとか親に言つてゐるけど、あたしは大概にしてお人よしだなと思う。

それでも親に従つてしまつたとか、あんなメールを送られてキレずに付き合つてしまつ。

「十五」

漏れる溜め息。

行つてどうなるものでもないけれど、気分が悪いし。

「あ……また、赤信号かあ」

何度もかの赤信号で停車する。

「え？」

見なければ良かつたと、思わず後悔した。視線を上げて、あたしは見てしまった。

祐緒を一目で、おたしは見てしまった。

耳障りな音は、ダンプカーのブレーキ音。

卷之二

なんで、こんな！？

冗談でしょ？ マジなの！？

突っ込んでくるのが分かるのに、逃げられない。
逃げ場が無い。

バツカヤロー！！何考えてんだあああああ！！！

ドカン！とも、ガシャーン！ともつかない、破壊音と衝撃が伝わる。

たる。

次の瞬間、身体がふわっと宙に浮いた。

車は空飛べるんだー！！

でも、こんな方法求めてないから！！！

手足がどこかにぶつかり、更に轟音が響いた。

そして、あたしの意識はブラックアウトした。

「んなの求めてないからー」（後輩や）

一部（？）実話を織り交ぜて作ってあります。
リアルに感じていただけたら嬉しいかも。

あの声の匂ひをなすローラー

田が覚めたら、柔らかい草の上だった。

ぽかぽかとした春の日差しのやうな温かい日差し（？）が、身体を温めてくれる。

身体を起りし、頭上を見上げると真っ白だった。

空の色は無い。
純白の天井。

手に当たる感触は柔らかくさわさわしい。
見ると、緑の草だった。
芝生みたいな感じだが、とげとげしていなくて葉っぱも少し大きめだった。

「ナニコレ？」

どーなつてんの？

キヨロキヨロと周囲を見回すと、大きな樹が一本ぽつんと在った。じそとかで出でるよつなアレだ。じの～そ～なあん～の～き～とか歌つちゃうアレな感じのものだ。

「リリビリよ〜。」

あたしがぼそっと呼べる。

「あの世との世の境ダ田」

田の前に顔が降つて來た。

「あやあ……」

思わず、びっくりして倒れ込む。

逆さの顔は、美少年だ。

何故かふよふよ浮いていて、逆さになつているだけだった。
くるんど、上下を引っ繰り返して美少年は縁に足を着いた。

「あはは～、『めん』『めん』、びっくりさせやつタ？」

屈託なく笑う美少年には、邪氣が無い。

服装は古代ギリシャ風の所謂、神話の神様が着ていた服に似てい
た。

髪は紺碧、瞳はエメラルドグリーン、肌は小麦色、服はクリーム
色の布地だった。

こんな美少年見たこと無い！！ 間違いなく夢だな、夢。
挤んだ事も無い美少年をガン見して、眼福だな～ってほにゃ～つ
としてる。

「お～～い？ もしもーし、ぼくの言つてる事、理解してル？」

手を振り振りして、あたしを見詰めてる。

「え？ あ、いや、見とれました」

正直に答えると、美少年は笑ってくれる。

か、可愛い……。

思わず抱き締めたくなる可愛さだ！

「あはは～、ありがとう。キミみたいな子初めてダヨ」

「それは、褒めてるのかな？」

「うん、モーダヨ」

ここにこ笑つて、あたしに手を差し出して起き上がる手伝いをしてくれる。

うわあああ～。

いいの？　いいの？

ドキドキしながら、その手を取ると思つよりも強めの力で引っ張られる。

ちゃんと立て、目の前の美少年をたつぱり黙視してから正直な感想を述べる。

「夢としては、極上な夢だわ」

過酷な現実逃避をする為にも、アニメやアイドル、果ては俳優までいろいろハマった。

B～だつてオッケーな、根っからのノーサーなあたしとしては、この夢は極上だわ。

「だから～夢じゃないってバ

「へ？」

「キミ、死んだんだヨ」

「え？」

「もっかい言つね、キニは死んじやつた」

「つそーん」

「嘘じやないよ。見るも無残な感じで」臨終ダコ」

「……」

「思い出してみなコ?」

「ええと……確かに自殺未遂メール貰つて……」

「そう、車でオトモダチのトコロへ向かつてテ」

「信号で止まつてたら、後ろからダンプが突つ込んできて……」

「せうせう、そんで死んじやつたノ」

美少年があまりにもサラッと告げるものだから、毒氣を抜かれて
しまい。

怒るとか、嘆くとか、喚くとか出来なかつた。

生れるか死んでしまうか?

まさか、こんな感じで死ぬとは思わなかつた。

恋愛して、彼氏作つてデートしてHだつてしてみたいのに！
まさかのまさか、18歳で昇天・・・・。

しかも、自殺未遂したトモダチが心配で向かう最中に交通事故に
遭うとは、あまりにも馬鹿じゃねえのジブン？ と罵りたくもなる。
涙も出ないよ・・・・・・。

「ありや？泣かないの？キリ」

呆れるあたしを見て、美少年が不思議そうに覗き込んで来る。

ぎやーーー！ 頬が近い！ 近すぎる！

心臓に悪い！

だが、嬉しい！ 抱き付けたらもつと嬉しいかもしれん。

でもそんな積極的に出来てたら、今頃死んでないか。

女は結構薄情な生き物だもん。

恋愛か友情かつて言つたら、恋愛取るでしょ？

それに、ラブラブな状態の子に懃々鬱なメール送るヤツもいない
だろうしね。

大体は自然に疎遠になつていいくものなんだよね。

美少年をじつと見てから、あたしは一応訊いてみる。

「死んでるだから、泣いても意味ないんでしょう？ それとも生き返
るわけ？」

「ムリ。生き返つたらゾンビだよ、ホラーダネ」「ホラーって……」

「スプラッタな死に方だつたからネ～」

「そんなに酷いんだ?」

「まあまあ酷いかな?見たイ?」

「見たくない!――」

にこやかに美少年が怖い事を言うので、即座に却下。

死に目なんて見たくない。

事故死した近所の子を目撃してるけど、あれはまだ綺麗な方だつたのは分かる。

それでも、衝撃的だつた。

今でも思い出せる位に。

だからこそ、自分の死体なんか見たくないし、その現場なんかみたら吐いちゃうよ、きっと。

「……ねえ、君は天使なの?」

人間離れした超美少年で、自分の事を知つてゐる。
あたしを黄泉へ導く者なのだろうか……。

「ま、そだね。人の概念で言えば、そう、死天使つてやつダネ」「にしては、天使の羽とか、わつかとか無いね」

「頭の輪は、元々無いよ。羽はあるよ、見たイ?」

「え、見せてくれるの!?」

「うん、いいよ。減るもんじゃないからネ」

そう言ひと美少年の背中に輝く翼が生える。

キラキラと光つててちょっと眩しい。

透き通る羽は、とても綺麗だ。

「すゞい、きれー」

正直な感想を口にして拍手と賛辞を送ると、美少年天使は嬉しそうに笑った。

「アリガト。そう言って貰えると嬉しいネ」

死を司る天使なのに、こんなにも人懐こくていいのか？ とちょっとと思つ。

一瞬で羽が消える。

「ねえ、川に三途の川とか、レテの川とか、黄泉の入り口とかないし。アヌビス神が迎えに来たりしないの？」

「あはは。キミ例外みたいなものだから、あっちの世界に渡る前にココに来たんだヨ」

「例外？」

「ソ。例外だ。人が肉体と言ひ器を持つて生まれて來るのは何でだと思ウ？」

「死ぬためでしょ？」

「端的に言えばそうだね、他にも理由ある分かル？」

エメラルドグリーンの瞳は、何かを探るようにあたしをじっと見詰める。

フレッシャーを掛けられている感じがする。

回答で地獄行きとかあるのかな？

「ん〜〜？ 学ぶため？ とか？」

「一言で言つならそうなるネ」

「キミが今まで感じたコトを言つてみてヨ」

「え？」

「死ぬまでの過去を振り返つてみてどう感じタ?」「過去……えっと」

思い返してみる。

思い出すと腸が煮えくり返りそうになる思い出たち。

罵詈雑言でも吐けばいいのか?延々と言えちやうよ、きっと。きっとこの美少年天使が言えつていうのとは違うのは分かる。

「思い出したくないくらい嫌な過去多いんだけど……」

「そうだね、知ってるよ。でも、キミは自分の視点だけではない事を学んだよね? 理不尽な世界、不公平な世界、生があり死がある世界、欲望のままに生きたらどうなるか、世界のバランスを取らない人間達の末路について考え方を出したよネ?」

「う、ん……」

もしも、何か大きな出来事が起きた時、人はずっと便利さばかりを選んでいれば、きっと自分の首を絞めると高校生の弁論大会でそんなコトを言つた事もある。

理不尽な世界を作り出すのは人間。

不公平な世界を作り出すのも人間。

大切なものと便利なものは違うのに気付かない、気付こいつといいの人間。

生命のバランスは絶妙に出来ていて、ある意味完璧な状態と言える。

それを平気に壊すのも人間が多い。

寿命や事故死は、定められた運命かもしれないと思つ。命を奪われるのも、一つの運命なのは分かる。

それが欲望のせいたりすれば、人の心や世界に波紋を投げ掛ける。

なんの為に生きるのか？

何故死んでいくのか？

生きるもの全てに問い合わせている。

他にも疑問に思っていた。

動物愛護だと声高に主張するのに、動物の命を食らって生きるのは変だと。

捕鯨反対と言つて船を沈めるのは海を汚した上、鯨だけじゃなく他の海洋生物全てを危険に晒すんじゃないのかと。

言つてる事はある意味正論かもしれない。

だけど、凄く矛盾している。

命は大事だ！

掛け替えの無いものだと言つが、人も動物も植物も全て命あるものに違いは無い。

それなのに、何故か線引きをするのは変な気がした。

これだつて命じやん、あれだつて命じやん、それだつてやつぱり命でしょ？

なのに、差別するのはおかしいとずつとずつと思つていた。

理由は簡単、全ては人のエゴの物差しで計られている。

誰も死なない世界。誰も傷付かない世界。生命を奪つて生きる事をしない世界。

それは、素晴らしい世界かもしねり。

でも、それって生きてるの？

天国みたいな世界つてコトは、完結した世界つてコトじゃないの？

「うん、そうだね。人の世界は矛盾で、生と死に満ち溢れている。けれど、完璧な世界もある。苦しみ、悲しみがあるからこそ、喜びもある。嬉しいコトが、どうして嬉しいと感じられるか分かル？」

頷いて美少年天使が言った。

言葉を発しながら理解してくれるのをあたしはすんなりと受け入れていた。

それが当たり前だと何となく理解していたから。

頭の中を覗かれて、嫌な気はしない。無条件に受け入れられる存在だと分かっているから。

「辛い事があつてそれを体験するから？」

「そう。その通りだ。感情が発露するのは体験があり、また肉体と言つ器があるからで、魂の状態では意味を為さない。魂はエネルギーの一つであり、等しく同じものであり、全ての魂はひとつなんだ」「ひとつ？」

「イメージ的には。沢山の魂達は、星達の様に無数にあり、銀河や大きな宇宙のを形成しているよつのものなんダ」

「……」

「難しいかな？でも、コレが一番分かりやすいと思うんだケド」

「沢山の魂達で、一つの宇宙と言つものになつているってこと？」

「そうそう。肉体を持った時点で、感情や学びや色々な物事に左右され、人は現世を学ぶ。どんな悪い結果だとしてもネ」

「悪い結果で死んだら、悲しくない？怨んだりしちゃうでしょ？」

「キミは怨んでいる？」

覗き込む様に美少年天使に問われる。

「よくわからない」

怨んだって、悲しんだって、憎んだって、何も変わらない。
むしろ自分が強くあらうと出来なかつたのが悪いとも思う。
心が強ければ、夢だつて掴めたかもしれない。

弱い心のままの自分を選択したのは、他でもないあたし自身だ。
だから、わからない。

何が正しいのかなんて、知らない。

「正解なんかないんだヨ」

「え？」

「怨む生き方を選択したのは自分自身。魂の時、ヒトはある程度未来予想図を描いて生まれてくる。本筋は一本だけど、多くの選択の中で選び、その結果を掴んでしまう。それだけなんだヨ」

「ある程度未来予想図ってどんなの？」

「例えば、生まれる所は何人家族で、試練は自分が病気になつて生命の大切さを伝えたり、精一杯生きていくためだつたりとかネ」

「あたしも、こりこり風に死ぬつて計画して生まれてきたつて事なの？」

「一応はそういうんだけど、目的と相当変わっちゃつてね～。だからキミは、今ココにいるワケ」「どーゆーこと？」

「ぶっちゃけて言っちゃつと、本当は死ななくて良かつたんだけど。あの状態で生き残らえるのは可愛そุดだな～つて思つてネ」

「そ、それは…… もしや」

「うん、ぼくの一存で連れて来ちゃつた！ テヘ」

「一コツと笑つて、爆弾宣言をする美少年天使をあたしは呆然と見詰めた。

死天使とあたし

「だつてキミ面白いんだもン。」

にんまり笑う、美少年天使は褒め言葉か分からぬ台詞を吐いた。

「面白いから死なせてくれたわけ？」

「そーだよ。通常の状態だと肉体と魂は離れないし、ぼくら天使にも分離出来ない。でも、あの時のキミは切れ掛かつてた状態だった。だから、ぼくにもキミを連れて来る事が出来たダ」

「……」

「不満？ あのままだと苦しんで苦しんで辛かつたと思つナジナ」

「そうだろうね。物凄い衝撃で吹っ飛んだのは覚えてるし」

「ぼくはね。キミと話してみたかったんだ。だから連れて来たノ」「どうして？」

「若い」のクセに、ものすんごい考え方持つてるから見てみたかってタ

「タ」

「見たい？ 訊きたいじゃなくて？」

「見たかったのは魂。魂がどこまで変わってきているかを見たかったんだ」

「魂つて変わるもののなの？」

「うん、変わる。学んでそれを受け入れたらね。キミは本当に面白い存在だし、ぼくを楽しませててくれたからチャンスをあげようと思うんだ」

「チャンス？」

「『』のまま天国に行くか、前世の記憶を持ったまま生まれ変わるか
どうがいい？」

天国と転生の2択ってどーなのよ？

おかしくない？

天国と地獄どっちがいい？ って言つなら分かるけど。
変な2択だ。

「それは、チャンスって言うの？ 微妙な選択肢じゃない」

「そーかなあ。キミなら面白い人生を見せてくれると思うから」
の提案なんだケド」

「面白いつて…… 酷くない？ それ」

「なんで？ 酷くなんかないし、まあ前世の記憶を持つて生まれてくるのはちょっとだけリスクがあるけど、記憶が無くて自分が行った事に対して後悔する率少なくなるじゃん？」

「リスクって？」

「前世の感情に引っ張られるつてトコロとか。まつさらな状態から作り上げる人格じゃなくなるから、どうしても培つてきたマイナス要因が邪魔をする」

「……」

「それでも、愛される事や愛する事を実感出来るよ、どれだけそれが幸せなのか？」

優しい眼差しで美少年天使は見詰めてくる。

どきりとして、呼吸が止まる。

「ぼくはね、キミに悲しいだけの真理を体験しただけで終わって欲しくない。だから、選んで」

「記憶を持ったまま転生しあって事なのね？」

「うん。 キミの要望も聞くよ?」

「要望って?」

「どんな所に生まれたいとか、あるでシヨ?」

「うん……」

いきなりそう言われても、即座に思ひ浮かばない。

「ま、取り敢えず、じつち来テ」

手を取られて、あのでっかい大樹に案内される。
どーんと鎮座している大木は、凄く威圧感があるが、不思議と安心感もあつた。

「幹に手を触れテ」

「えつと、じつ?」

そつと右の掌を幹に押し当てる。

木の皮の「じつけ」感が、触れた所から伝わってくる。

何の意味があるのかは分からないうが、美少年天使を見詰めると。

「そういう、それでどんな所で生まれ変わりたいか言つてみテ」

「え……」

「希望だよ。 家族は何人とか、時代背景はどんなだとかあるでシヨ」「えつと……」

思い浮かべる。過去自分が欲しかったもの。

「あたしを愛してくれる両親、兄弟が欲しいな、お兄ちゃんがいい

さわさわと樹の葉が揺れた。

頭上を見ると、緑色だった葉っぱは銀色に光つてゐる。幻想的だ。

「OKだつて。他の希望も言つてみて」「え、じゃあ、宇宙旅行が出来る世界で」

嫌な時はいつも星を見ていた。
遠い遠い場所だけど、色々な冒険や未知と遭遇してみたいと空想に耽つて気持ちを紛らわせていた、小さな自分。
幻想はどこまでいつてもただの夢想でしかないのも知つていた。
想う事で心を保つっていた。

「魔法とかも存在している場所に生まれてみたい」

馬鹿みたいな妄想。

夢を見る事で、悲しみから逃れられていた。

死んでいて、何も失うものが無いなら願つてもいいよね?
冒険したいとか。
ファンタジーに溢れてる世界とか。
銀河を超えてみたいとか。

そして 愛されてみたい。

神様……そう願つても良いですか?

サワサワと銀色の葉がざわめいている。

頭上の部分だけじゃなく、大樹の全部の葉っぱが銀色に輝いていた。

キラキラと光つてて、莊厳な一枚の絵を連想させた。

「OKだつて。その望みは全て叶えられるπ」

微笑みをたたえて美少年天使は、はつきりとあたしに言った。

「え？」

「輪廻の樹が認めてくれたんだよ。喜びなπ」

「え？ えええ———？」

思わず大声を上げてしまひ。

嘘でしょ？ 嘘でしょおおおお……

百万歩譲つてSFは良いとしよう、だつて、いつか誰が実現させ
るだらうから。

宇宙を旅出来るつて夢と言つよりは、ずっと先の未来だからね。
魔法の世界つて……ありえなくない？

混在出来ないと思つたのに！

「ふあいやーとか、めらとか、ほいみだとか、けあるとか、やつち
やつ魔法の世界だよ？ いいの？ 本当にいいの？」

無茶な設定バリバリの世界OKなんですか？

サワサワサワと枝が揺れ、答える様に輝く葉が音をたてる。

「うん、イイつて言つてるπ」

嬉しそうに美少年天使は笑つて言ひ。

「IJの樹がOKすればそつなるの？」

「やうだよ～。□□に迷い込んだ者の行き先は、この輪廻の樹が決
めるんだ」

キラキラ、サワサワと葉っぱが揺れていた。

そうだよ～って答える様に、風に舞うみたいに揺れ動く。

「無数にある世界の中で、キララピッタリな世界があつて行けるんだ。喜びなワ！」

美少年天使に、じ……つと覗かれる。

その時のおたしは自分がどんな顔していたのか分からなかつた。

「凄く、不安そうダネ？」

「え？」

「コワイのかな？」

『ル・ル・ル』

どう答えていいのか分からずにはいると、美少年天使が天使の微笑みをして言う。

「ハインでしょ、ハイア、ぼくがおまじないしてあげるア」

がふつ！！！
鼻血出そうな感じの。

く、クリティカルヒット！ 間違いないの。

なにの戻戻も...!

おまじないでかー？

「キリの魂が来世で輝きますよ!」「元

そう、言つて美少年天使は両手を伸ばし、私の頬にそつと触れて来る。

一呼吸の後に

ちゅうとう音と共に、額に美少年天使のキスが落ちた。

?!

目を見開いて、美少年天使を見詰め、口をぱくぱくしてしまつ。衝撃だ。衝撃の出来事だ！

なんだこれ？
なんだこれ？
どーゆうこと？

「フフフ。おまじないダヨ～。この位の役得あつてもイイでしょ？あ、それとも唇の方がヨカッタ？」

にこにこ顔の美少年天使に、あたしはあんぐり。
ぶつとび過ぎでしょ？ それは、なんでも……。
この場合、あたしが役得なのよ……ねえ？
美少年天使の「ちゅーだよ！？」

一生分の運使っちゃつたよ！
つて、とつくな死んでるから一生じゃないじゃん！

「たのし〜イ。ホントキミつて楽しい『だよネ』

あたしの混乱具合を見て笑顔を浮かべる美少年天使が、頭上を見てすっと表情を変えた。
はつとなつて、彼を見詰めた。

「えつ…ビュウしたの？」
「時間だ」

少し寂しそうに小さく笑つて、美少年天使が告げた。

「時間？」

「うん、お別れの時間。樹に背中を預けテ」

「……」「うへ」

ぐるりと反転して、背中をぴったり幹に着けて問い合わせる。美少年天使は、頷いて一步近付いてあたしの目の前に立つ。

「うん、そう。ねえ、一つだけぼくのお願い聞いてくれる力ナ?」「お願」「？」

「キミの名前を頂戴」

「名前?いいよあげるよ。ビーセ、好きな名前じゃないから」「思い出せなくなるけどイイノ?」

「欲しいんでしょ?」

「うん!欲しい!だから、頂戴」

美少年天使の強請る仕草もなんか可愛い。彼にとつては、貰つて嬉しいものなのかな?

あたしは、自分の名は好きじゃない。
親が付けた名前じゃなければ、そんなに嫌いにならなかつただろう。

皮肉的な名前に泣いた事もある。

「うん、そんなに欲しいならあげる。
今があたしにあげられるものはないから。
喜んでくれるなら、あげる。
あんな名前でいいなら、貰つて下さー。」

「うん、あたしの最後に良い思い出をくれたからあげる。あんな

で良ければ貰つて

「嬉しいナ。アリガト」

本当に嬉しそうな、輝くような笑顔で、美少年天使が微笑む。じきりとして、声を出せず息を呑む。

その刹那。

あたしの頬に影が落ちる。

「……んっ」

美少年天使の柔らかい唇が、あたしの唇を塞いでいた。

頭の中が真っ白になった。
触れるだけのキスだった。
直ぐ離れていった。

少し翳りのある笑顔が目に入る。

「有り難う。これでお別れだけど、キミの名前があるから寂しくないヨ。キミの名前、ずっと大事にするネ」

「……名前？」

自分の名前が思い出せない事に気付く。

美少年天使が、あたしの唇をそつと人差し指でちょっと触れる。

「言えないでしょ？ もうお貰つたからね」

「……あつ！」

「サヨナラ」

呆然としていると、トンと両肩を押された。

がくんど、半身が樹の中へを入り込む。

樹の幹が無くなっているかの様に、倒れ込むながらあたしは落ちていく。

物凄い速さで真っ暗な穴に、真っ逆さまに落ちていく様な感覚に全身が包まれる。

怖くて無かつたけど、いつの間にかぽつりと意識が途絶えていた。

樹の前で、美少年天使がぽつんと立っていた。

エメラルドグリーンの瞳が、寂しそうに樹の幹を見詰めていた。

そして、祈る様にぽつりと咳く。

「幸せになりなよ、愛花」
 あいか

と。

死天使とあたし（後書き）

死天使君が暴走しました。

名前は最後まで告げませんし、最後はほっぺにちゅーだつたのに！
そして、主人公の名前は死天使君だけのものになりました。（笑）

実は、この章難産でした。（——：）

最後まで読んで下さいまして有り難う御座います。

はじめまして。

「ササササササササ。

ちょっと強い感覚で揺さぶられる。

だあれ？まだ眠つていたいの?……。

バチーン！…と叩く音。

途端、激痛によつて、あたしは覚醒した。

「おぎやあー『イタイ』おぎやあー『いたいよー』おぎやあああー…
ー『なにすんのよー』」

ん?

声が出てない?

言葉になつてない?

口から出たのは、赤ん坊の泣き声だけだ。

「一時まどろなるかと思いましが、これで一安心ですね。マスター

ー
ー そう言って布にあたしを包むのは、瞳と髪は瑠璃色の中性的な美人だった。

でも、感情が一切入つていない感じだ。
物凄く違和感がある。

「では、通常任務に戻ります。何かありましたらお呼び下さい」
「解つているわ。有り難うね、ラピス。外にいる一人を呼んでくれ

る?」

「はい。了解致しました」
あたしをベッドに横たわる人に渡すと、その部屋から出て行つた
ようだ。

どうして出て行つたようなのかつて?
だつて、首が回らないから、目で見える範囲しかここがどんな所
か解らない。
視界は物凄く狭い。

見えるのは目の前にあるものだけだ。
左右には、あたしを包む布がもつさり(?)してゐる。

目の前には疲労の濃い顔をした、美女。
化粧はしていないのに、すつきりとした顔立ちと少しきつめの目元
が印象的。

瞳の色はエメラルド、肌は疲労のせいだらつか青白い、頬にさら
りと流れるストレートの白金の髪。
あたしを見詰めて。

「ああ、良かつた」

安堵の声を上げて、微笑みを浮かべていた。

「母様!」

声変わりのして無い声がする。

「ユーナ!大丈夫かい?」

低いテノールの優しい声が、美女に掛かる。

「貴方!^{レオン}コウ!」

美女が破顔した。とても嬉しそうな笑顔だった。

声を掛けた二人が、どんな人なのか見たいなーと思つていたら、ふわりと体が浮いた。

視界がぐるっと回る。

目に飛び込むのは、真っ白い簡素な内装と、出っ張った壁らしき所にデスプレイ（モニタのようなもの）がはめ込まれ何かを映し出していた。

その下に、動く机の様な物の上に、ノートパソコンみたいなものと、太いペンみたいな物が置かれていた。

見たことも無い空間だった。

「父様！僕にも抱かせてっ！」

「だあめ！俺が先だぞ、コウ」

あたしの真下の方で、男の子の声がする。

懇願をいとも容易く制するテノールの美声と共に、その声の主があたしを覗きこんで頬擦りした。

「逢いたかったぞ、俺の可愛い愛娘～つ」

嬉しそうに言うと、あたしを高い高い～つとして、頬にちゅつと口付けをした。

テノールの美声の主は、柔らかな金髪で、ちょっとタレ目の青い瞳で、肌は小麦色で、マツチヨ過ぎない均整の取れた体格の美丈夫だつた。

美丈夫の足元で、不満げな表情で見上げる美少年が一人。

「父様！するいーーつ！」

「レオン、コウにも抱かせてあげて下さい

「しょうがないなあ」

残念そうに言い、美丈夫ことレオンはあたしをそつと渡した。

きらりとした眼差しを向ける「ウ少年は可愛い。
瞳は青でサファイアの様、髪はサラサラした白金の糸の様、肌は
白く、まるでお人形さんのようだつた。

「僕は、君のお兄ちゃんだよ～。よろしくね～」

幸せそうな笑顔で、あたしに言つた。

「この3人があたしの家族なんだ……。

じんばゆい感じだけど、胸の奥がじ～んとなつてしまつ。

「あ、あ、あ、泣いちゃうっ。」

お兄ちゃんの慌てた声に、はつとなつたが抑え切れなかつた。

感情と意識と肉体とが同調しれないから、泣きそつこなつたら
止められない。

涙と声が爆発する様に出ていつた。

「おぎやああああ《うえええん》」

「泣かないで、泣かないで」

「お兄ちゃんは怖くないよ～よしよし」

兄は必死に泣かないでと声を掛けて、父は、ぽんぽんぽんと背中
を優しく叩いてくれる。

でも。

逆にその優しさが、一心に向けてくれる愛情が嬉しくて、涙が、
感情が止まらない。

「おぎやあああああ《うれしい》のありがとう」

あたしは泣き止む頃には泣き過ぎで疲れてしまい、この間にか
眠りに落ちていった。

はじめまして（後書き）

次回、主人公の名前が出ると思います。

(> < :)

家族構成です。

母：コーナ・アマハ

父：レオン・ルシェルシユ・アマハ

兄：コウ・ルウイン・アマハ

ナツキ・ルウイン・アマハ、イコール、私（前書き）

やつと出ました。主人公の名前。（^_^;）

ナツキ・ルウイン・アマハ、イコール、私。

アマハ家の娘になつて、あれから5年の月日が流れた。

あたしこと、私＝ナツキ・ルウイン・アマハは5歳になつた。

前世の記憶については、私が危惧していたよりもかなり軽い荷物になつていた。

どうやら、死天使が名前を持つていつたのが功を奏したみたいだ。名前が思い出せないだけで、辛い記憶も半減するのには驚いた。

自分の事なのに、まるで本を読んで感情移入しているかの錯覚を受けた。

それを見越して奪つたのかは、死天使こと美少年天使の胸中しか解らない。

いずれにしても感謝しても、し足りないくらいなのは事実だった。

あ、私の容姿はびっくりするくらい可愛い。

髪は父様から受け継いで、瞳と肌の色は母様から受け継いだ。

ふわふわの金髪は背中まであり、瞳はエメラルドの宝石をはめ込んだみたいで、肌は陶磁器のような白で、どこかにぶつかったりすると直ぐ癌になるのでもう大変。

兄様のコウも人形さんっぽかつたが、私も同レベルだった。

初めの頃は鏡に映つた自分の姿に慣れなくてぎょっとした。
どこの美少女か！？ って、何度思ったことか。

やつと、今はもう慣れて、あ、映っているのは自分なんだつて解

ぬるい元なつめした。

ナツキ・ルウイン・アマハ、イコール、私（後書き）

次がちょっと長めになりそうなので、分割しました。

スター・シップ・リュシオル

「ねえ。ラピス、ラグナリア星つてどんなトコロなの？」

今私がいる所は、スター・シップ
メインフレンジ宇宙船の操舵室。

メインスクリーンの前にあるパネルと椅子に陣取つて、映し出される宇宙空間を眺めていた。

その中央に位置する場所（船長席）には、床から伸びる接続端子を後頭部、首筋、手等に接続し椅子に座つてしているのがラピス。

出産の時、私を取り上げた、瞳と長い髪は瑠璃色の中性的な美人は、人工知能AIを搭載したアンドロイドなのだ。

ただのアンドロイドではない！

なんと、この宇宙船リュシオルのメイン知能でもあり、宇宙船そのものもある。

『一言で言えば、魔法惑星ですね』

メインスクリーンは宇宙空間を映し出しながら、別枠で右端にラピスが映る。

『詳しく知りたいのでしたら、資料がありますから出しましようか？』

『うーん、詳しく言われてもわからないかも』

椅子に腰掛けながら、足をぶらぶらさせて答える。

私が今日着ているのは、淡いピンク色のワンピースで、足をぶらぶらさせる度に裾のヒラヒラのレースが揺れる。

『それでは、ざつとお教えしますね』

「うん」

『ラグナリア星は、皇制度^{おう}によって統治されています。現ラグナリア星皇陛下は、セリティア・ラグナリア女王陛下で、我がマスターでありナツキ様のお母様の親友でもあります』

ぱつと画面が切り替わる。

映し出されたのは、髪は銀茶色、紫の瞳、肌は真珠のような白で、美しいルビー色のドレスを纏い、王杓を手に持ち、頭には王冠を被り威風堂堂とした姿の女性だった。

「この人がセリティア女王陛下？」

『そうです。このフォトは5年前の戴冠の時のものです』

「カッコイイね~」

『次に、大陸についてですが。大きな都市は、東西南北中央に分かれています。東は王立聖騎士団があります。西が宇宙科学工業都市で、宇宙港もここにあります。南が魔法学園都市。北が王都で王宮があります。中央が中央都市で国民の大半がここに住んでいます。後は細かな地区などがありますが今回は省きます』

5つの都市のデータ画像が、パパパパパツと画面に映る。

それぞれの都市は、特色のある作りだった。

王立聖騎士団のある地は田舎っぽくて、宇宙科学工業都市は未来的で、魔法学園都市は緑と学校が融合した独特な雰囲気で、王都は中世ヨーロッパの様な感じで、中央都市は住宅やビルなどが多い都市だった。

『南の魔法学園都市には、マスターユーナが学院長をされているジ

ユラーレ学院が御座います。学院では、魔術科と宇宙科が学べます。ナツキ様もここにいじ入学される事になるでしょう『

「ふう〜ん」

あまり実感が無い為、生返事で返す。

母様は、魔法界の女帝と言われる存在なんだけど、私の前では普通に母親でいるのでイマイチピンとこない。

父様は、婿養子で宇宙考古学者をして、あつちこつちへ行っている。

魔法も結構使える人らしい。

二人とも私の前では魔法を殆ど使わないので、どれだけ凄い人達なのかが未だに解らない。

兄様は良く色々見せてくれるが、私の前で使ったのがバレると母様と父様に怒られるらしい。

どうやら、私は魔法（魔力）に関して何か問題を抱えているらしい……あくまで推測だが。

でなければ、二人が私に魔法を使いたい時は必ず言いなさいなんて釘を刺す理由が見付からない。

真剣に言われたので、好奇心で魔法を試そつと思つても試みた事は無い。

ある程度、理解出来るようになつたら教えてくれるのだろうとは思つている。

「そう言えば、コウ兄様、来年から学院行くって言つてたね？」

本来なら13歳から入学するのだが、母様や他の人達に習つているから15歳から入る事にしたらしい。

2年分のブランクは飛び級で何とかするようだ。

『「コウ様はナツキ様の事が気掛かりで、出来るだけ入学を延ばしてたそうですから』

「……コウ兄様は、シスコンよねえ』

『ええ、それはそれは、ナツキ様の事を目に入れても痛くないほど可愛がり様ですから……ジュラーレ学院に入つても毎日欠かさず連絡が入りそうですね』

「クギ刺しておかなきやダメかもしけないね？ 毎日連絡つてイロイロとモンダイでしょ』

『それは……なさらない方が良いのではないでしょうか』

シスコン振りを知つているラピスは提言する。

しかし、私としては何は無くともまず私に連絡して、それから勉強や学友達との交流などと言つ構図が見え過ぎて非常に怖い！

間違いなく「可愛い妹に連絡してから行く（する）よ！」って宣言するに違いない。

そんな兄様見たくない！

10歳の時の兄様は、お人形の様だったが今では美少年から美青年へと変貌を遂げる過程の真っ最中で、どちらかというと可愛い要素よりもカッコイイの要素の方が比率が大きくなっている。

ふと見せる仕草なんかは可愛いんだけど、頼れてカッコイイ、自慢の兄様でいて欲しい。

なので、兄様のシスコン振りをあつちこつちで露呈するのは、妹として阻止すべき重要案件だ。

心の中で決意する私に、ラピスが言った。

『お母様から、先ほどナツキ様にお部屋に来る様にと『連絡が入りました』

「母様が？」

『はい。後、1時間程でラグナリア星系内へ入りますから、星へ降りる』準備かと思われます』

「じゃあ、お部屋に行くね。あ、星見させてありがとうね！』

『喜んで頂けたら光榮です。また、見たい時は言つて下さい。何時でも歓迎致します』

「うん！じゃ～ね！」

メインモニターに向かつて、バイバイと手を振る。

部屋の真ん中にラピスの身体があつてちょっと違和感があるのが、モニターに映っている時は身体の方は抜け殻の状態なのでモニターの方が本体と言つ事で認識している。

そうして、私は操舵室メインブロックを後にした。

ラグナリア星に来たのは、明後日に催される、セリティア・ラグナリア女王陛下戴冠5周年を記念したパーティーに参列する為だった。

女王陛下戴冠記念パーティーがどんなものか興味津々だが、着飾つて出席するとなると色々とマナーとかあって気後れしそうだ。

「つそり覗き見る程度なら嬉しいんだけど……。」
と、絶対無理な願いだとわかっているが、ついついそう思つてしまつのは前世の庶民癖のせいかもしれないね。

スター・シップ・リュシオル（後書き）

コウ兄様、頼れてカツコイイ、クールビューティーが、いつの間に
かシスコンになつてしましました。（涙）
次回出るかも？シスコン兄様！？（笑）

余談メモ。

リュシオルは日本語だとホタルです。
ジュラーレは誓いです。

女王陛下と母様と父様

ラグナリア星、唯一の大陸『アイフィロス大陸』北部にある王都そこでは、本日から3日間、街を挙げてのお祭り騒ぎであった。

才媛の美姫と謳われ、女王となつたセリティア・ラグナリア陛下の在位5年目（戴冠5周年）を記念にした式典＆夜会が王宮では行われる。

そのお祝いかこつけたお祭りが、街中の公園などで市民主催で行われてもいた。

女王陛下は意外とこの星の民には、人気の存在であった。民の声を聞きその声と取り入れたり出来る豪傑な人でもあり、人柄も民から慕われていた。

その為か、彼女が王になつて5年目なんだから、お祝いしようと言ひつ事で街を挙げてのどんぢゃん騒ぎに発展したとか何とか。

公園内には出店が出たり、音楽の道を志している者や本職に至るまで園内で音楽を奏でたり、ダンサ舞踏家はその音楽に合わせ踊りを披露したり、夜には花火が打ち上げられたりと、かなりの盛り上がり具合である。

「……」

そんな街の様子を馬車の中から見て、私は啞然とした。

物凄い楽しそうな皆の姿に驚いた。

今日は、驚きの連続でなんともいえない心境になつてゐる。

だつてねえ）。大陸の西部の宇宙港から、どんなエアカー（反重力で動く車）に乗つてどんな道を走るのかと思つたら……地下だつた。

碁盤の目のように張り巡らされた地下道を走るエアカーに乗つて、目的地に近い昇降口で下車し地上へと戻る。

このエアカーなんと国民は皆タダだそうな。

その代わり、地上にあるのは人力車や馬車や鉄道で見聞の良い感じの作り、観光にも活用されている。こちらは国民も有料。

多少の不便があつても、職業に就ける要素をと宣言つ事でそつ宣言つた政策を取つてゐるんだつて。

その甲斐あつて、エアカーで遠方から働きに通えたりと国民にとっては物凄く重宝し、かつ恩恵を受けるといつ良い循環を作り出していた。

宇宙港からここへ来るまで、女王様を讃える垂れ幕をみたり、詩を歌つたりしてゐる人を見た。

そんなワケで、女王様は超人気者だつた。

そんな人と母様が親友つて、どんな経緯が合つたのか知りたくなつた。

「ねえ、母様？女王様とおトモダチなんだよね？」
向かい側に座る母に問い合わせた。

今日の母様はの髪型は、綺麗な白金の髪をポニーテールにしている。

瞳の色と同じエメラルドカラーのピアスとネックレスをして、服は生成り色の生地に華麗な刺繡を施したパンジャビ風ドレスを着ている。

異国情緒溢れる衣装なのに、さらりと着こなしていた。

「ええ、そうよ」

「どんな人なの？」

「そうねえ……強くて、人を見る目があつて、自分が認めた人には優しい人だわ」

「強い人なんだ？」

「ええ、強いわよ。何て言つたって私とレオンを取り合つた人だもの」

「へ？」

私の口から間抜けな声が出た。

レオンって、父様のことよね！？

女王様と取り合つたの！？

それは、マジですか母様！

恐る恐る聞き返してみる。

「母様、今、父様を取り合つたって聞こえたけど？」

「うん、そうよ。でも、セリティア……セリは最終的には諦めちゃつたの」

「諦めたって？」

「女王になると決めてたから。私もセリも、父様にとつて宇宙考古学が何よりも大好きなのを知つてゐるから、彼を星に縛り付ける事になるのを由としなかつたの。だから、身を引いたのね」

「で、私が猛アタックして結婚したの。それこそなりふり構つてなかつたわね。学院を卒業する前に何とかしなきやつて」

「母様、もしかして学生結婚だったの？」

「頑張ったのよ。最後は『わ』のお陰で結婚出来たんだけどね」

「……」

「『』笑う母様に、私は呆然するしかない。

これは、間違いなく、父様が罵にハマつたんだろうなって思う。

それでも、父様が母様の事を愛してるんだろうなって事はわかる。父様が帰つて来る時は母様も凄く嬉そうだし、父様も母様に会えた時の表情とかで嬉しいんだろうなって分かる。

愛妻家で、家族思いの父様だ。

時々だけど、私に対してねちっこい。

構わないと妙に拗ねて、うだうだと言ひのよみ。

毎回「父様お帰り～大好き～！」ほっぺにチュー出来ません。
我が家儀式なんだけね～。

母様と私が、父様と兄様にお帰りつてすると。

父様と兄様が、私と母様にただいまつてするの。

逆もまた然り。

ほっぺにチューは挨拶であり、神聖な儀式でもあった。

でもね！ でもね！！！
恥ずかしいのよ～！～

父様と兄様は、美形さんだから特に！

実の父と兄にときめいてビーすんのさー～ と、何度も突っ込んだ事か。

困るね本当に。
人前でもやらされたりするし、この先なんとかしないといけないよね。

ラブ・ラブ家族恐るべし！！

この王都にある、母様の実家『アマハ家』邸[モニ馬車は着実に近付いていた。

父様と兄様の待つている邸宅です。

私が確実にやらされるであろう儀式に、小さく溜め息が零れたのは言つまでも無い。

女王陛下と母様と父様（後書き）

余談小ネタメモ。

常緑樹＝アイフィロス

父と兄の攻防戦（笑）

な、なんじやー!つやああああああーーーーーーーー?

と、思いつ切り心の中で叫んだ私はもう、どうでもいいぢやないですか。

王都つてどこもかしこも観光都市だね！

四

アマハ家の邸宅（？）も、お城ですよ。豪邸です。

お姫様気分を味わえるけれど、庶民からしたらちょっと怖い感じです。

入り口のホーリーも大きくて
なにこのホーリーじゃなしん?
うて

入り口で「お帰りなさいませ」と待ち構えていたメイドと思わしき人もいたが、その内何人がアンドロイドなのかは傍目には解らぬ。い。

実質 半数以上は「アントロイトだとは思ふ」
機密保持の為とかで、信用の出来る人間しか周りに置けないんだ
とまことにばやいていた事があつたし。

美術館の様な回廊を歩き、父様と兄様の待つてゐる部屋へと案内される。

גָּדוֹלָה וְמִתְּרָא

感情の入らない声で、メイドがドアの前に立つ。

「何か御座いましたら、お呼び下さい。ご主人様^{マスター}」

「解つたわ」

口調と任務をこなしている体からして彼女はandroイドだ。ペコリと頭を下げて、身体を反転し何処かへと歩いていく。

コンコンコン。

母様が木製の扉のドアを叩く。

慌てた様な音が聞こえ、扉が勢い良く開かれる。

「お帰り、二人とも！」

満面の笑顔で、父様のレオン・ルシェルシユ・アマハが両手を広げて待ち構えている。

「ただいま、レオン」

父様の頬にちゅっとキスをして、母様は父様と抱き合ひ。

金髪、青瞳の、小麦色の肌と違和感無い均整の取れた体格の美丈夫と、美女の二人が抱き合ひ姿は絵になるなあとんびり見てしまう。

「ここに来るまで問題はなかつたかい？」

そう聞きながら、父様が母様に頬にキスのお返しをする。

「ええ、何も問題なかつたわ」

「それはよかつた」

うんうん、と頷いてから父様は母様から手を離し、私の方へ視線を合わせる。

うつ！ ヤバイ、美形パパがロックオンしたぞ！

思わず、足が後退しそうになる。

「ナツキ、どこ行こうとするのかな？」

父様は微笑んでいるが、どこか咎める口調だ。

「え、どこにも行かないよ？何言つのかな？父様はあはは、と笑って誤魔化す。

「じゃあ、おいで」

父様は私の背に合わせる様にしゃがみ込んで、腕を広げた。

うづうづ。

ハズイよー。公開処刑だよねコレ。

ええい、飛び込まなければ更なる悲劇（笑）が待っているんだから度胸を決めるのよ、私！

「ただいま、父様～」

笑顔を貼り付け、腕の中に飛び込む。

すると、軽々と抱き上げられ。

「会いたかったよ～。愛しい娘ナツキ」

私がほっぺにキスする前に、父様からの熱烈な、ほっぺにチューが降る。

「～～～～～！ くすぐつたい～～」

私が腕の中でじたばたしてると、父様の足元でごすっと音がする。

「痛いぞ、コウ」

サファイアの瞳が父様を睨んでいる。

白金の髪をかき上げて兄様、コウ・ルウイン・アマハが言った。

「Jの音源は、兄様の足蹴りだった。

「父様こそ、独り占めはダメだつて言つてた筈だ！」
成長した兄様は私を奪い取れる位の身長を得ていたので、私を父様から奪い取る。

「大丈夫だつたか？」

「……えつと、うん」

貴公子の笑顔を向けて来る兄様に、どきまさしながらじつくりと頷く。

「元気そうで安心したよ、お帰り、ナツキ」

「うん、ただいま。兄様」

兄様の頬を両手で添えながら、軽くちゅうとキスを送る。

嬉しそうな笑顔で笑う兄様は、ステキだ。

これが、私限定つてトコロが嬉しい気持ちもあるが、先行きが不安にもなる。

シスコン街道まつじぐらは……ね、イタダケナイよホント。

「コウ！お前だけずるいぞ……ナツキ、父様にもして！」

美形パパの顔が歪む。

泣きそつになんないでよ。私が悪いみたいじゃない。

「……父様」

ちょいちょいと手招きして、近付いた父様の頬にキスをする。

「ナツキ～～い」

父様が破顔して私を抱きしめようとするのを兄様が、ひょいつと

避ける。

父と息子の間に火花が散る。

お人形宜しく抱き上げられている私は、逃げようがないので困る。助けて求めるよう、母様を見るとい、樂しそうに笑つてゐる。

間違いない、面白がっている。

収集つかなくなる——歩手前まで、観戦する氣だ！

誰か助けて～～～～～～～～～つ！！

和心の口叶人九

父と兄の攻防戦（笑）（後書き）

兄様＆父様が出てきました～。

「ゴテゴテした派手な外装ではなく、洗練されたシックな感じの嫌味にならない美しい細工が施された馬車から、初めは父様、次に父様の手を借りながら母様、そして、兄様が私の手を取り、誘導してくれるが覚束無い足取りで恐々降りる。

桜色のフリルやらドレープやらが引っ付いた、ゴージャスなドレスに身を包み、履き慣れないちょっと踵が高いヒールを履いていれば足元も心もとなくなつても仕方ないよね。

今、私たち家族がいるのは王宮の正面に位置する場所で、今夜の夜会に呼ばれた招待客が馬車で乗り付けられる様にと入場時間を設定して解放されている。

招待客を乗せて来た乗り合い馬車は、そのまま通常業務の関連で街の方へと戻るが、持ち主がいる馬車は厩舎の方へと預かりとなる。

御者にはアンドロイドの一人、カラールが担つていた。彼女はシヨートの黒髪黒目で、一見すると男性にも見える顔立ちだった。服装も黒で固めて、ストイックな出来る人つて感じだった。

警備している騎士っぽい人がカラールと何かを話していく、彼女は頷くと御者台に乗り馬車をゆっくりと走らせていく。

乗つて来た馬車はアマハ家所有のものだから、厩舎の方へと行くのだろう。

「ナツキ? どうした?」

「え?」

はつとなつて、声がした方に顔を向けると、燕尾服に身を包んだ兄様がじっと見詰めていた。

「緊張してるのかな？」

「あ、うん、そうかも……」

「なら、ずっと俺の手を握っているといい。もし、変な奴が来たら追っ払ってやるからな」

ぽんぽんと、頭を優しく叩いて笑う兄様を頬もしく思いながら私は答える。

「うん、ありがとう。兄様」

「任せておけ」

ウインクして答える兄様は、素直にカッコイイ。

これはこれで、年頃の娘さんは放つて置かないのではないかなあ？ って思つ。

引っ込み思案なタイプはまず来ないだらうけど、イケイケタイプは間違いなく「どこからいらしたの？」とか「一曲踊つて頂けますか？」ってのはありそうだ。

流石に妹と踊りますなんて言つ、兄様の回答は無いとは思つが。身長的に無理だからね～。

ガラガラガラガラ……。

次の馬車が入つてくる。

「入り口へ入つて奥へお進み下さい。入り口に付近に案内の者がありますので、お困りの際はお声を掛けて下さい」

警備の騎士っぽい人が父様と何かを話してから、私達にも聞こえ

る様に言つた。

「コウ、ナツキ、行きますよ」

「はい、母様。行こう、ナツキ」

「うん」

兄様の手をしつかり握つて、足を踏み出す。

目に前にあるのは豪奢な宮殿。

いつの時代も、王様ってのはこう言つ建物大好きなんだうね。
右端から左端までの全長つてどの位だろう？ つて位に長い。

白壁に空色の模様が描かれていて綺麗だ。

扉は木製で左右に開くタイプで、精緻な金の細工が施されていた。

扉の前には、騎士らしき人が一人いて、敬礼をしてから左右の扉を一人が開けてくれる。

ゆつたりとした足取りで、母様と父様が中へと入っていく。
私は、兄様に手を引かれながら一緒に中へと進んでいく。

お城の中に入った、私の素直な感想としては、

広い！ でかい！ 綺麗！ 超豪華絢爛！

眩暈がしそうになる程の豪華さに、圧倒される。
そして、広過ぎるよ！

廊下も長いし！

同じ様な扉が一杯だし！

はぐれたら、絶対迷子になるよね、この広い中じゃ……。

気を付けないと大変だ。

うん、兄様の手を離さないか、父様か母様にべつたり引っ付くしかないかも。

そう、私は心に決めた。

危機的状況（前書き）

分割IPOです。

危機的状況

が。しかし！

そうそう、物事は上手くいかない事もあるんだって事をすっかり忘れていた。

50メートル×20メートル位の豪華絢爛な大広間に、右側には立食出来るテーブルが端に並べられており、かつ給仕に付いているのが解る同じお仕着せの男女がトレーとナフキンを持って控えていた。

左側上部には、楽器を持った人達が何時でも弾ける体制で待っている。

最奥の場所は一段上になつて、一客の豪奢な椅子は女王陛下が座る場所になつていた。

ド緊張しながら、アマハ家一家全員で女王陛下の前で挨拶をして、夜会が始まつてその場の雰囲気に慣れ始めた頃に事件は起つた。

うわーー！ すゞおーーい！！

貴族の世界だ！ ダンスパーティーだつ！ と浮かれました。

ええ、おのぼりさんの如く、周りをキョロキョロ見回し。

あれはなに？
これはなに？
つて、好奇心丸出しで見てた私が悪いんだけどね。

兄様がお姉さま方に群がられ、その勢いが壮絶で思わず手を離してしまつたが最後、あれよと言つ間に引き離されてしまつた。

大広間の中にいれば見つけて貰えるだらうと思つて、食べ物があるテーブルに行つて暫くの間、デザートを食つていたんだけど。

チョコレートケーキとか、ゼリーとか、チーズケーキとか色々あつて美味しかつた。

流石にお腹一杯になつてしまつたので、広間の中にいる美形さんをウォッキングしたりして暇を潰していたら。

「お嬢ちゃん、迷子なのかな？」

と、紳士ぶつたハゲかけの中年太りのおっさんが、見下ろしていた。

「違つよ。兄様を待つてゐるだけ」

ちゃんとそう答えたのに、おっさんは私の手首を掴んで力任せに引っ張る。

「仕方が無いね。おじさんが受付へ連れつて行つてあげよう」

「ちょ！離して！」

声を上げたが、テンポが良く派手な伴奏と歓声で搔き消されてしまう。

女王陛下と誰かが、踊る姿を視界の端で見える。

周囲の田^たがそこへ集中する。

その上、私の居た所が入り口付近だったのが災いして、子供の力では振り払えない力で引き摺られる様に外へと連れて行かれる。

「離して！離してよ！..」

騒ぐ私の口を素早く片手で塞ぐ。

「んーんーんんん！！」

「どうかされましたか？」

入り口に居た見張りの騎士が、何事かに気付き声を掛けて来る。

おっさんは笑顔を張り付かせて。

「いえね、家の姪が癪癩を起こしたので連れ出すといろなんですよ。

迷惑を掛けたくないもので」

くニヘこと頭を下げて謝る。

「ああ、そういう事ですか。失礼致しました」

「んんんんんんんんん——！」（訳：騙されんな！馬鹿——
——！）

私は騎士に向かつて突っ込んだが、気付きもしない。

「では、失礼します」

おっさんは、してやつたりの顔つきで、小走りに入り口付近から
退散して行く。

「んんんんんんんんんん——！」（訳：能無しめええええええええ——！
！）

私は引き摺られながら、状況を見定めない騎士に罵声を浴びせた。

危機一髪

そうして、私が連れ込まれたのは庭園だった。

如何わしい事をするなら、どこかの部屋でもいいだひつに何で庭園？と思わず思つてしまひ。

「さあて、お嬢ちゃんには役に立つて貰わないとね」
突き飛ばされる様に手を離され、よろけて緑の絨毯の上に尻餅を着く。

「つー」

見上げるとお嬢さんは、下卑た笑いをしてくる。

正直、気持ち悪い。

それと、今さつとき役に立つて言つたよね？　「コイツ。元々、私を狙っていたって事？」

どうしよう、逃げるにしてもどうやって逃げようか。

視線だけを動かして、逃げ道を探す。
まずは、相手を油断させる事が肝心だ。

「私、あなたの事を知らないのに、どうしてこんな事をするの？」
泣きそつた感じで皿蓋を少し伏せて言つてみる。

「悪いのは、全部お嬢ちゃんの母親だよ。怨むなら母親を恨むんだな」

憎憎し氣に言つてお嬢さんは、どうやら母様に因縁があるみたい。

「宮殿内は色々と魔術が施されているから、何かしよつものなら騎士や他の連中が飛んで来るからな。」
「だったら大丈夫だろうから。どうしてやるうか……」

「ふつぶつと呟くおっさんは、気持ち悪い。

室内を選ばなかつたのは、見付かる確率が高いからだつたみたいだ。

と、言つ事は本氣で逃げないと危ないのね、私。

「そうだ。いい事を思い付いたぞ」

「え？ きやー！」

小太りのクセに手癖は早いらしく、右手を伸ばし私の柔らかい金髪を無造作に掴み吊り上げる。

「ふん！ いい気味だ」

おっさんは、にやりと笑いながら言つ。

「痛い！ 痛い！」

引っ張り上げられた髪を押さえつつ抗議する。

あ～～！ も～～！！ 何で転生してからもこんな目に遭つのか。
髪引っ張られるの地味に痛いんだよね！

遠い昔に前世の父親にやられた記憶が蘇る。
「どうしてたつかけ？ 思い出せ！ 私！！

とりあえず、足は地面から離れていない。
よし、なら、やることは一つ！

弁慶の泣き所を田掛けて、思いつ切り蹴りを放つ。

「！」のう……」

つこでにヒールの先をめり込ませて蹴ると。

「ぐあ……」

悶絶の声と共に、私の髪からおっさんの手が離れる。

徹底的に蹴倒したいが、如何せん分が悪い。

「！」は逃げるか勝ちだろ？と思いつ、建物に向かってダッシュで走る。

もう少しで建物の近くにならうといつとこいつ所で、足に何かが絡んで転倒してしまう。

「いたたたた……」

足元を見ると、変な薦のよつな物が足首に絡まっている。

「ナニコレ？」

手で外そうとしても外れない。

「やつても無駄だよ

「つーーー！」

声のする方向は、逃げて来た方向だった。

「流石はあの女の娘だ。忌々しいな」

ゆづくとした足取りで、近付いてくる。

「来ないで！」

言つてみたが、無理だった。

「先程の礼だ」

おっさんは田の前に立つと、手を振り上げた。

何が来るか解ったから、田を興り歯を食いしばってやり過いりや。バチン！！ と頬を打つ音が響く。

目の前がチカチカする。

何度体験してもこの痛みは、いいものじゃないなと思つ。

「小娘風情がこの俺を馬鹿してただで済むと思つなよー。」

激高しておっさんが、ガツと両手で私の首を絞めに掛かる。

「くつ……」

私は抵抗しながら、おっさんの手首に爪を立てる。

首絞められた経験は、前世でもあるけどー。

この状況はヤバイ！！

本気で苦しい。

このままいくと、落とされるか。

マジで死ぬ！

「助けて……父様……あ、さま……こ、い……ま

喋る事も辛くなる。

呼吸も出来ない程に締め付けて来る。

嫌だ！こんなトコで死ぬなんてイヤーー！

助けてー！ 助けてー！

誰か助けてッーーー！

意識が遠退く瞬間。

バーンッ!!

と、轟音と地響きの様なものが辺りに響いて。絞められていた手が、首筋から離れる。

「ぐ……は……っ！」

一気に気道に空気が入つて来て、『じほ』じほと私は咽た。

周囲ではバチバチと電気がショートする様な音と、ピシッピシッピガラスにヒビが入るような音が絶え間なくしていた。

「遅くなつてごめんね。大丈夫？」

咽こむ私に、誰かが声を掛け、手を差し伸べた。
涙目になりながら、私は顔を上げる。

年の頃は、私と同じか少し上かもしない少年が立つていた。
月の光に照らされて輝く銀茶色の髪が風で揺れている。
じつと見詰める紫の瞳が幻想的な雰囲気を醸し出して、より一層少年の秀麗な表情を深いものにしていた。

「くそ。誰だつ、邪魔をするのは…」
怒鳴り散らす声がする。

さつきの衝撃で吹つ飛んだおっさんの声だった。
その声を聞き、紫の瞳がキラリと光を帯びる。

「陛下の庭でふざけた真似をしている癖に、その暴言は最悪だな」

「つぎや…！」

おっさんが潰れた声を出した。

「そのまま、潰れ蛙みたいにしている」

少年は一度おっさんへ一瞥して、私に向き直つて。

「燃カウシス」

そう呴くと、両足の戒めが一瞬にして火に包まれて消え去る。

ほわつとした熱さを足首に感じたが、火傷などなく全然平氣だつた。

私は差し伸べられた少年の手に、自分の手を重ねる。

優しく、壊れ物を扱う様に、引き寄せられる。

「もつと早く気付いてあげられたら良かつたのに。怖かつただろう？」めんね

「え？」

少年の紫の瞳を覗き込んだ、その時。

「前々から馬鹿だとは思つていたけど、ここまで大馬鹿だとはね。私の敬愛するお姉様の娘こを攫つた上、私の庭で危害を加えるなど言語道断よ！！」

少年の前方に、紅蓮の炎が巻き起こる。

炎と同じ色合いのドレスを纏つた美女が出現する。

「女王様……」

怒りの炎を背負つて彼女、セリティア・ラグナリア女王陛下はそこにいた。

危機一髪（後書き）

余談小ネタメモ。
カウシス＝燃焼

女王×美少年×オカマ？＝王宮は濃ゆい人達が一杯だつ（前書き）

分割してみました。

女王×美少年×オカマ？＝王宮は濃ゆい人達が一杯だつ

燃え上がる炎に髪が煽られ、その横顔は壮絶に美しい。

美女はお怒りになつても綺麗なものなんだなあ」と、私は思った。

妖艶な美女クイーンと、不可視の力により、潰れた蛙の如く地面に縫い付けられジタバタする小太りのおっさんとの対比は何だか凄いものがある。

「キッチリ、仕置きをしなくてはいけないわね。その前に、カグラ！彼女を連れて行つてあげなさい」

セリティアは冷たい視線を足元に投げ掛けた後、こっちを振り返つて言つ。

カグラと呼ばれた少年は頷くと、私の耳元で囁く様に告げた。

「少しの間だけ我慢して」

ぎゅっと、私は抱き締められる。

「え？ あ、あの……？」

ワケの解らない展開に軽くパニックになる。

「サリーレ」

カグラが囁いた瞬間。

身体がふわっと浮き上がるような感覚と、視界が暗黒に包まれた。数秒間の後、かくんとした感覚と明るい光が目に飛び込む。

しかし、私は、その感覚に酔つた。

うええええ。気持ち悪いーー。

何か、むかあし、体験した事のある感覚ですよ。これは！嫌いな人はいるよね、絶対。

エレベーターのふわっと浮き上がり、止まる時に落ちる感覚に酷似していた。

油断してたりすると、気持ち悪くなるんだよね、アレは。そして、今、私はその状況になつてます。

「もしかして、転移は初めてだつた？」

私の様子を見て、カグラは心配そうに覗き込んで訊いて来る。

私はコクコクと、小さめに頷いて答えた。

「あらまあ、それは辛いかもね。はい、これでも飲んで落ち着きなさいな」

カグラと私の側に一人の男性か、女性か解らない妙に派手な人がいた。

顔の造形は良い方だが、如何せん、髪はビンクで、瞳は綺麗な澄んだ水色、身長は180位だろうか？ 結構高い。

なのに！

極彩色の膝丈までの長い服を着て、革のサンダルっぽいものと履いていた。

勿体無いと思わず言つてしまいたくなる程の残念さを目の前の人から感じた。

ハスキーボイスだったので、彼？ 彼女？ かはちょっと解らない人から水の入ったグラスを渡される。

グラスを受け取り、口元に持つていきながら、私は極彩色豊かな人物を凝視していた。

ちびちびと水を飲んでいると。

「アタシの事気になる?」

妙にオカマ口調な感じで、極彩色な人は言った。

私は素直に頷く。

こんなド派手な人を気にならないで、初対面でやり過(い)す事の出来る人なんている訳ないじゃない。

「初めてまして、アタシは王室の治療師で、名前はシェン・シア・メ

ーディカよ。れっきとしたオトコよ。ヨロシクネ」

ワインク付きで極彩色の人、シェンが私に挨拶をしてくれた。

「あ、私は、ナツキ・ルワイン・アマハです。ナツキって呼んで下さい。あと、お水、有り難う御座いました」

ペコリと頭を下げ、グラスを返すと。

シェンは微笑んでから、私の頭を優しく撫でる。
「酷い目に遭つたみたいね。で、そこベッドに座つて」

指し示す方向には、大きめなソファーやテーブルがあり、その向こう側にベッドがあつた。

「あ、はい」

「待つて!」

歩こうとした私を、カグラが引き止める。

「え? 何?」

「足、怪我してる」

「あ……」

足を見ると、転んだ時に擦り剥いた為に膝の辺りの生地が破れ、血が膝を伝つて足首辺りまでを汚していた。

派手に怪我しちゃったなあ……。

あーあ、折角のドレスが勿体無いなあ。
きっと高価なものなのに。

のんびり
冷静にそう思つていたら。

「ちょっと失礼」

カグラはそう言つと、私を軽々とお姫様抱っこをした。

「？ + * # % ! -」

田を見開いて、声にならない叫びを私は上げた。

全くもって、意表を突いてくれる美少年だと思つ。

頭一個分位しか身長差がないと言つのに、さらりと抱き上げてしまつなんて結構力持ちなんですね、カグラ君。

スタスターと歩いて、私をベッドの縁に座らしてくれた。

「カアツコイイー、流石は王子よね～」

ヒューーヒューと、シェンが言つと半眼で彼を睨んだ。

「俺は王子じゃない。間違えるな」

「ああら、王子も次の王太子も変わらないじゃないの」
水が入った手桶のような物と、タオルの様な布を持つてケラケラと笑いながらシェンが言った。

「え？ええ？王太子？」

目の前に居るカグラと、シェンを代わる代わる見詰めるとびっくりした顔で。

「え、名乗つてないの？王子！？」

「だから、王子は止める」

そう言つと、はあ……と息を吐いてからカグラは私を見た。

「俺の名は、カグラ・ジーノ・ラグナだ。ラグナ公爵家の長男だ。
呼び方はカグラでいい」

「あ、はい。えっと、助けてくれて有り難う御座います。カグラ様」「
様はいらない」

「え、でも、公爵家のなんでしょ？」

「い、のよ。様なんか付けて呼ばせたら、陛下に怒られるものねえ？」

シエーンが私の足元に、桶を置いて布を一枚その中に入れ、乾いたもつ一枚を私の脇に置いた。

「ああ。だから、俺の事は気にせず、カグラと呼んでくれ」

シエーンに頷いて答える、カグラを見ながら「のかなあつて思つが、わつきの女王陛下の言葉を反芻してみる。

『私の敬愛するお姉様の娘』って台詞から察するに、母様の事が好きなんだつて事が解る。

どんだけ、母様はこの國の中枢に食い込んでるのや。考えたくないなあ～。怖いもん。

「裾捲るけど良いかしら?」

ぱちゅぱちゅと布を濡らして絞ると、シエーンが私に告げた。

「あ、はい。じゃあ、私、裾押さえてますね」

擦り剥いた箇所まで、生地を捲り上げて両手で押さえる。

「ちょっと染めるかと思つけど我慢してね」

「大丈夫ですから、ぱぱっとやつちやつて下さー」

痛い事はわざとしちゃつた方が良いものだから、私はそつ答えた。

「じゃ、失礼して」

「こりりと笑って、シエンは濡れた布で血の汚れとかを拭き取つて
いく。

傷口に触れた時、少し痛かつたが問題なく我慢の出来るレベルだつた。

優しく手早くしようとシモンの心遣いが見えた。

「はい、出来た。それじゃ、治癒しちゃうわね」

-お願いします

「**治癒**」
キュー・ア

シエンが私の傷口に手を翳して呪文を唱えると、ぽーつとした光
が生まれる。

まるで螢の光の色に似ている。

柔らかい輝きが身体に染み込む様な温かさを私は引いてくれる緊張の糸が解されていくのが解った。

「はい、傷の方はこれで良し！次は他の所ね。手を見せて」私はシエンの言葉に従つて、両手を差し出す。

「も治しちゃいましょ。」
治癒キュー

シンはそう言つと呪文を唱え、私の掌を元通りの綺麗な状態へと変えてゆく。

「後は……」「お」

じつと見詰めるシエンの視線の先は、首筋。

「えと、そんなに酷いんですか？」

「間違ひなく、それを見た陛下は暴れるとは思ひし、父上も賛同し

て何かをしでかすと思つ位、良ことは言えない」

「わあ、ステキ 宰相様も参戦しちゃうんだ〜」「

ションが茶化して言つ。

ステキと言つているが實際、田は笑つていない。

父様や兄様が見たら、号泣して大騒ぎにはなりそうな感じかもしない。

それはそれで、色々と問題がある。

「触れるけど良いかしら?」

ションが私に伺う。

もしかしたら、ションは私に拒絕されるのかもと思つてゐるみたいだ。

「は〜、お願ひします」

きつぱりと言つてお願いすると、ションはきょとんとした顔をしてから一いつ口こと笑つた。

「じゃ、少し我慢してね」

ションはそつと、そつと私の首筋に触れてくる。

「^{キューラ}治癒」

ほわん……とした温かさが首筋に宿る。

「は〜、おしまこよ」

「有り難う、シエンさん」
「どういたしまして」

ワインクして私に笑いかけるシエンは、派手な服装とは違い人を和ませる感じが強かつた。

不思議な人達だなあ」と、私は素直に思った。

暴走兄様

「ナツキィイイイー！」

叫び声と共に、扉を壊しそうな勢いで入つて来たのは兄様だ。^{「わ}その形相に、ショーンとカグラは呆気に取られて固まってしまった。

兄様が、我を忘れているわ……。

黙つていれば、カツコイイのに！と思つたのは言つまでもない。

だだだだだつ！

と、物凄い勢いで私の所まで来ると。

「ナツキ！大丈夫だつたか？変なことされてないか？」

そう口走り、問答無用で私をがばーっ！と抱きしめる。

その力たるや、容赦がない。

「に、兄様！」

ばしばしと腕や背中を叩いて、気付いて貰おうと試みるが「心配だつたんだぞ！」「などとブツブツと言つていて私の願いを聞いてはくれない。

「にーさまつ……痛い！」

私はバシバシバシ！

と、思いつ切り連續で叩くが……兄様は、自分の世界に入り込んでいる。

鳩尾にでも一発入れてしまわないとダメか？

と、思った時。

「折角治療したのに、怪我させる気なの？ アンタは！離れなさいっ！」

シエングが怒氣を込めて言い、兄様をべりつと私から引き剥がしに掛かる。

「ひちへおいで」

少しだけ力強く、私を兄様とは反対方向へ引き寄せる腕があつた。その腕はカグラで、私を抱き留める様に、兄様から数歩分離してくれた。

「大丈夫？」

優しく問いかける声に、ほつと息を吐き。

「ありがと」

お礼をすると、ふわっとカグラは微笑んでくれた。

大人びた表情に隠れていたが、カグラはそんな風に笑えるのね。確かに、王子様っぽいね。

年相応なら、きっと初恋になつていてもおかしくないくらいの、どきりとする微笑み。

きっと、青年になつた時は、ものすんじーくモテモテになるわね。公爵家の人はだし、超優良物件間違いなしだ。

ぽんやつと、彼を見つつ思つていたら。

「ああああああああああああああ！」

奇声が上がる。声の主は、兄様。

「ナツキーお兄ちゃんはそいつとの交際は認めないからなー。」
シエンに羽交い絞めにされつつも、じきつぱりと宣言をかます兄
様に、頭が痛くなる。

あーあーあー。

どこをどつして、そななるのか？

と思わず突つ込みたくもなるが、暴走している彼を止める者は今
の所いない。

「つたく、いい加減にしろよなー。」

オカマ口調ではなく、ドスの利いた低音ボイスがシエンの口から
吐かれる。

そして、羽交い絞めを解くと素早く、兄様の脳天に手刀を一発落
とした。

とつても痛そうな、じゅうと言つ音がした。

「うっ……」

兄様は頭を抱えて、その場に座り込んだ。

「そんなんだから、この子があんな事に巻き込まれるんだよー。過
保護なのもいい加減にしろー！」

「シエン」

吐き捨てるよつに言つシエンを咎める様に、カグラは名を呼ぶ。

「アタシが、女王陛下に怒られてあげるわよ。このまま帰したら、
この子が真実を知る機会を失いかねないわよ」

意を決した眼差しがそこにはあった。

ただの治療師が、そこまで解るものかとも思うけど、カグラに砕けた感じで接している時点でそれなりの影響力を持っているのは確かだろう。

女王様に怒られるだけで済まされるのは、余程信頼されているか、身近でそれを許されている地位など持っているに違いない。

「大丈夫よ。後で、レオンの方もちゃーんと丸め込んでおくから」ふふふと笑つて言うシエンは、いたずらつ子の様に見えた。この人は父様とも知り合いらしく。

「さて、ナツキちゃん。真実知りたくはない？」

私の前に立ち、強い光を宿した瞳でシエンが見詰めてくる。

「……真実？」

私は、ぽつりと呟く。

隠されていた真実

隠されている事、故意に隠蔽されている事は何となく感じていた。知つたからどうにか出来るとも思えない。

母様や父様が隠したいと思うには、それなりの訳があつたんだろうし、心労だつてないとは言い切れない。

けれど、何となく解つていて、自分が取つた行動で問題が起つるのは気分の良いものではない。

知つていれば防げる場合だつてある。

「……教えて下さい。私、知りたい」

「なつ！ナツキッ！」

私の言葉に、大いに焦つたのは兄様だつた。

「こめんなさい、兄様、私ね。皆が何か隠していたの知つてたの」「ど、うして……」

「だつて変だつたんもの。母様は魔法界の女帝つて言われてるのに、私の周りには魔法と触れる機会が極端に少ないのはどうしてって」

「そ、それ、は」

「私の前でちょっとした魔法を見せてくれた兄様は、母様に怒られたのだつて変だつて思つた。私に魔法の才が無いなら父様はきっと、無いなりに生きていけば良いつて言うだらうじ、でも、やつ言つワケでも無さそうだつたから聞けなかつた」

「あらら、よしよし。ナツキちゃんは良い子ね」

シモンは苦笑して、私を慰める様に頭を撫でてくれる。
優しい手付きに、気持ちが和らぐ。

「シェン、立ち話につき合わせる気か？」

顎で示して、カグラは言った。

指し示す先は、ソファード。

「そうだね。や、座つて、ナツキちゃん」

「はい」

一人に促されて、私はソファーに腰掛ける。

私の隣がカグラで、向かい側にシェンでその隣は兄様。兄様は、私の隣を陣取れなかつたので不満気味だ。だけど、シェンに反対して文句を言つ事を一切しない。彼が、父様の近しい人だと解つているからかもしれない。

「さて。どこから話そうかな。んー、まずは、ナツキちゃんは魔法についてどの程度知つているかしら?」

考えながら、シェンが私に問い合わせてきて来る。

私は包み隠さず、自分の解る範囲で答える。

「たぶん、ほとんど知らないと思う。魔法適正についてなら、火属性とか水属性とか、そういう事は一応解るけどそれ以外は……」

知つていて、見ている魔法は極少ない。

一般的な知識（本とか記事とか）は、多少なりとも宇宙船の端末から見る事が出来るから解るけど。

実際、文字を読める様になつてから色々見たのだが、間違いなく魔法書に関してのものはアクセス制限が掛けられていた。
不用意に実践しないように。

「なるほど。じゃあ、悪いけど『見』させて貰つても良いかしら?」

「シエン、それは……」

シエンの台詞に、カグラが目を見張つて表情を変える。
シエンはそんなカグラをチラツと見て、何事もない様に話を続ける。

「ナツキちゃん、アタシの属性はね、透視なの。未来を見通す力、探しものを見付ける事も出来るわ。けれど、通常はそれを自分で制限してるので、だつて要らないものまで見たくないでしょ。ナツキちゃんが生まれる前にレオンから『この子の未来を見て欲しい』って言われて見た事があったわ」

「どうだったの？」

「良くなかったわ、けれど、最悪な事でもなかつた。周りの者が注意すればいいだけの事だったからね」

「今、私に話すのは問題があるからなのね？」

「ええ。今までそれで良かったけど、これからは間違いなく問題が起きたわ。未だにレオン達が、ここに来るのが決定的ね。いつも嫌な勘は当たるものよねえ」

溜め息混じりにシエンが言つ。

「だから、見させて欲しいの。女王陛下や宰相様やレオン含め、命令されたら結局見ないといけなくなる。意識があるなし関係なくね。きっと、寝ている間にとかだろうけど、アタシとしてはちゃんとお伺い立てておきたいのよ。ダメかしら？」

「うん、見ていいよ」

私は深くゆっくりと頭を下げる。。

どうしてでも『見られる』なり自分の意志できちと見てもらいたい。

何よりも自分の事だから、受け止めておきたい。

何も知らない子供のままなら、きっと嫌がつただろう。

だけど、自分は、前世でトコトン嫌な目に遭っている。

無駄に振り回されて、折角の人生を、時間を費やしたくない。

母様や父様は、私を愛するが故に選択するのだろう。

全てを隠してずっと生きることなんて出来ない。

遅かれ早かれ、いずれ自分はその事実に辿り着く。

何もかも投げ捨てて、死を選ぶなんてのもしないし、何よりもこの家族は私にとって大事な人達だ。

そんな人達を自分の為に心を碎いて、悩んで、苦しんで欲しくない。

私が聞いてしまえば、負担だつて軽くなるだらうし、自分がしてはいけない事をちゃんと知つて対処だつて出来る。

でも、母様も父様もきっとそんな事、望んでいないだろう。
だから。

ごめんなさい、母様、父様。

私は顔を上げて、シエンを見つめた。

私の瞳に現れていた決意が、見て取れたのだろうか、シエンは小さく頷き返してくれた。

「ナツキちゃんの属性はね『破壊』よ。ちなみに、王子の属性は『グラヴィティ』で、ナツキちゃんを助ける時に使つてたわね」

「ああ、そうだな」

大した事でもない風に、相槌を打つてカグラは答える。

「……」

「ああ、確かに、あのおっさんが地面に押さえ付けられてた。あれは、カグラの仕業だつたんだ。何となくそんな感じはしていた。」

あの時、その場に居たのはカグラだけだつたから。

「あの時ね、異変が起きている事に気付いて見通す力を使つたら、ナツキちゃんがいたの。あの馬鹿者の行動で……生存本能だつたのだと思うわ。ナツキちゃんの力が発動して、王宮の庭園の結界魔法が壊れたのよ。王宮内は、色々な結界魔法がかけられているわ。かけたのは歴代の王や宰相、この国にある魔法学院の上級魔術師などもいるわ。半分以上、その結界魔法にナツキちゃん達の母親である、ユーナは関わっているわ。だから、今ココへは来れないの。結界修復に手間取つてゐるからね。それと……実際、ユーナの魔法を無効化したり、壊したり出来る者は殆どいないの。それほど、あの人は強いのよ。その魔法を壊したという事は、その事実を誰かが知つて悪用しようと考える者が出て來てもおかしくないし……出て来るわね、間違ひなく。気をつけなさい」

シエンの辛そうな瞳とぶつかる。

本当はそんな事、言いたい訳じゃないんだろうつて分かる。
出来ればそんな未来の一片でもなければ良いって、思つてくれたのだと思う。

「うつくり、首を縦に振つて私はシエンを見た。
「はい、気をつけます」

「何か相談したい事があつたら、何時でも言いなさい。一人で抱え込まなくても良いんだからね？」

「うん」

「ナツキちゃん、貴方次第で未来は変わるわ。だから、諦めちゃダメよ?」

「うん」

優しく父様みたいに、シエンは頭を何度も撫でてくれた。

隠されていた真実（後書き）

やつと出ました、ナツキの魔法属性です。^{ブレイク}破壊です。色々壊せます、危険ですって事で隠していたんですね～。

カグラ君は重力です。^{グラヴィティ}

母様＆父様の属性つきまして、まだまだ内緒です。ちなみに、セリ女王は火炎です。^{フレイム}

大人達の会議 another side1

本来ならば、月の光が落ちる庭園は綺麗なものだったが、今現在は異様な空間と化していた。

パチパチと、電気の様なものが庭園内の上やら下やら、空間のあちこちで光つて弾けている。

「……どうしてくれようかしら」

怒りを隠そとせず、セリティア女王陛下はこの事態を招いた者を睥睨した。

拘束用の重力魔法を掛けたカグラは、もう庭園には居ない。しかし、眼下でじたばた地面に這い蹲つて固定された愚か者はそのままだ。

この魔法を解く事は容易いが、セリティアはそれをしなかつた。この場で、この者を裁く事も出来るがそれをしたら面倒になる事も解っていたから、イライラする気持ちを抑えて来る者を待つた。

「お、お助け下さい、陛下！」

「……喋るな下衆が」

媚を売る様に言われ、ぷきつとセリティアの中で何かが数本キレた。

「私を更に怒らせたいらしいな」

思いの丈を乗せ、ガツ！ハイヒールの踵で、その者の手の甲を思いつ切り踏ん付けてやる。

「ぐあ！…」

悲鳴を上げてジタバタともがく。

「じつとしていなければ、お前の顔が焼ける事になるぞ」
セリティアは、そいつの顔面きりぎりの所に炎を出して、置くと
多少なりとも溜飲が下がった。

それでも、怒りは収まる訳がない。

「幼い子を手にかけ様として、自分は助かるなどと思つなー。」
バッサリ一刀両断にする様に、セリティアは宣告する。

「それに関しては、同意見です」

スタスタスタと、セリティアの側に寄つて來た。

セリティア似の面差しを持つ男性が口にする。

彼の名は、テンリ・ジーノ・ラグナ。

公爵家の現当主で、宰相閣下で、カグラの父親でもあつた。
髪は銀茶色、紫の瞳、冷たい表情が似合う美貌で、身長はヒール
を履いているセリティアよりも高く、190センチはあつた。

二人は双子で、身長が同じ位の時まではその気になれば入れ替え
也可能なほど似ていた。

今は、女性、男性の身体つきなどで全然違う風に見えるが、顔の
パーツを良く見ると似ているのが解る。

性格は、セリティアが炎の様な気性を持ち、テンリは氷の様な氣
性を持つていて、實際このお蔭で政務のバランスが上手く取れてい
た。

「テンリ。遅いわよ！」

「すみません、姉上。近衛に対して庭園一帯の封鎖の通達指示と、
ユーナ様とレオン様に庭園の状況を見て貰うために色々とやつてい
たので」

「それで、どうなの？」

「はつきり言って、最低1ヶ月は庭園を封鎖しなければならないかと。俺も見て来ましたが、空間はかなり断絶していたり、結界もまた壊滅状態ですね。一つマシだと思えるのは、被害が庭園だけに留まっている事くらいですかね」

「そこまで酷いのね？」

「ええ」

「本当に、どうしてくれようかしら、この愚か者を……」
冷や汗だか脂汗だか、解らないものを顔から流しながらブルブルと震える罪人を睨みながら、セリティアは呟く。

そんな彼女を意を汲みつつも、テンリはさうりと告げる。
「取り合えず、地下牢へと転送して置きましょう。到着されたお一方が暴走されるとも限りませんし」

「ええ、やつといて」

セリティアの言葉に頷き、テンリはさつと手を振る。
すると、一瞬の内に罪人は消え去る。

その直後、セリティアとテンリの眼前の方から歩いてくる者が一人いた。

「ユーナ姉様、レオン……」

「セリ！」

セリティアを見とめると、ユーナが小走りに一人の所へと行く。
少し遅れて、レオンが続く。

「セリ、ナツキは？」

「カグラが治療室へ運んだわ」

「なら、大丈夫ね？」

「ええ」

「ごめんね、セリにも迷惑を掛けてしまったわ」

「私の方こそ、もつと注意しておけばこんな事態にならなかつたのに……。『ごめんなさい、お姉様』」

セリティアは、コーナに頭を下げる。

「セリ、女王がそう簡単に頭を下げてはダメよ」
俯いたまま首を横に振り、セリティアは答える。

「ユーナ様、姉上は珍しく自分の失態を謝罪しておりますから、気持ちを汲んで上げて下さい」

苦笑しつつ、テンリはコーナに言うと。

「解りました。その謝罪受け取ります。だから、もう顔を上げて……ね？」

「お姉様……」

力なく顔を上げて、セリティアはユーナを見た。

「大丈夫よ、こんな日が来るかもしけないと予測はしていたから」「ごめんなさい、お姉様」

セリティアはユーナに抱き付く。

ユーナはセリティアを落ち着かせる様に、その背をぽんぽんと叩く。

それを横目で見つつ、テンリはレオンに向き直る。

「それで、レオン様、庭園一帯の状態はどうでしたか？」

「多少時間が掛かるとは思つが、空間も結界も直せる」

「では、修復に必要な魔術師の要請を頼めますか？」

「お義父さんに頼んでみます」

「魔法学院の理事長ですか、でしたら心強いですね」

「こんな事になつた責任は、こつちにもありますから出来るだけ対応させてもらいます」

「それでは、一旦、ここから引き上げましょ。庭園封鎖の用意をさせていますから」

「ええ、そうしましょ」

レオンは頷いて答えた。

大人達の会議 another side 2

庭園を後にした4人は、セリティアの自室にいた。向かい合わせのソファーに、セリティアとテンリが座り、反対側にコーナとレオンが座っていた。

「セリ、頼みがあるの」

「お姉様？」

真剣な表情で言うコーナをセリティアは見詰める。

「本当はもつと後の事だと思ってたわ。でも、今回の事で決めておかなければいけないって思ったの。こればかりは、私の一存でどうこう出来ないから……」

「私が、お姉様のお願いを無下に出来ると思いませんか？」
「思っていないわ。だからこそ、出来る事なら避けたかったの。巻き込んでしまって」「めんね」

苦渋満ちた表情を浮かべるコーナの肩にそっとレオンが触れる。レオンは、小さく頷いてコーナの言いたい言葉を紡いでいく。

「これは、アマハ家の、俺とコーナ、そして義父の総意もある。ラグナリア星皇家の後ろ盾をお願いしたい。ナツキが成人するまで、自身の力を扱える様になるまで、その御名で守つて欲しい」

深く頭を下げるレオンに、驚いた様に目を丸くするセリティア。
そして、その意図が何を示すのか理解し、テンリはふうっと息を吐きだした。

「それは、我が息子に盾になつて欲しいという事ですか」

「私の名前では、下手をすればあの子は狙われる。今回の様に……。他にも魔法の無い場所へと行かせる選択肢もあつたけれど、あの子の持つ力では、それが解決策にならないの。力が安定し、使いこなせるまでどの位の時間が掛かるかは解らない。最終的に魔法学院へ入れるならば、ラグナリア星皇家の御名は抑止力になるわ。あの子の安全はそれなりに確保出来る」

苦しそうに瞼を伏せて、コーナが言葉を吐き出していく。

「そうでしょうね。この星に居る殆どの者なら、ラグナリア星皇家に対し愚かな真似はしないでしようからね。ですが、レオン。いいんですか？こちらとしては、正直、魔法界の女帝の名をラグナリア星皇家に引き入れる事は願つてもない事ですよ？この星に不可欠な結界魔法を施す力を持つ者を本来ならば、それなりの報酬を出してお願ひする所を確実に足許見られて値切られますよ？」

「やっと口の端に微笑を乗せて、テンリはレオンとコーナに告げる。

足許を見るけど良いのか？と言外に言つてているのだ。

そもそも、財政やらをも統括する宰相閣下だから自分が指示するんだと、ペラッと白状している事に他ならない。

横目で、セリティアがテンリをちらつと見るが平然としていた。

「あの子の安全が確保されるのなら、願つてもない事よー。」「顔を上げてコーナが、きつぱりと言い放つた。

「良いでしょう。今現在、カグラには決まった婚約者はいません。カグラは冷めますから、いずれ自分をターゲットにしてくる女性達を避ける為にも間違いなく、この話に一枚噛んでくれるでしょう。姉上がご結婚されてお子を授かるまでは、俺がラグナリア星皇家の第1皇位継承者で、カグラは第2皇位継承者です。宰相を続ける場

合は辞退する事になりますから、カグラが自動的に皇位に一番近い者になり、ラグナリア星皇家を継ぐ者になる。まあ、その場合、ナツキ様は皇太子妃候補か、王妃候補になりますけどね。それで、良ければ構いませんよ」

「それと、ナツキの力が安定し、一人の内どちらかがその関係を破棄したいと願つたら、私達は速やかにそれを受け入れます。無理強いはしたくないもの……」

ユーナがゆっくりと言つた。

大人の打算だらけの事だけど、それでも、本人達の気持ちが大事だとユーナは思つた。

「ねえ、もしも、二人が本当に恋仲になつたらどうするの？」

ふと、気がついたようにセリティアが言つ。

「それはそれで、構いませんよ。俺はね」

ふふふ……と、企み顔で笑うテンリをじと見つめるレオンが、口を開いた。

「ナツキを嫁には行かせないぞ、テンリー！」

「レオン、あんまり娘にベタベタしてるとこつかウザイって言われて嫌われるぞ」

娘が可愛いくて仕方のないレオンを知つていて、テンリは面白がつてからかう。

「うぐつ……」

テンリは、自分の所業に多少心当たりがあるのか口籠もる。

「ま、家と縁組になつて一番嬉しがるのは姉上でしょうけどね」

「そうよね！大っぴらにお姉様って言つても誰にも文句は言われな

くなるわね！なんて素晴らしいの！お姉様、是非ともこのお話を進めましょう！」

セリティアは暴走しかかるが、テンリがさらりと言つて宥める。

「こればかりは、二人の気持ち次第ですからね。大人はお膳立てして見守つてしまふか。周りがどうのこうの言ひと上手くいくものもダメになりますからね」

につこりと笑うテンリは、宰相閣下だけあって策士であった。

ナツキ15歳の時・・・

「え？え？え――――――！」

壁兼巨大スクリーンになつていてるディスプレイモニターを見て、私は絶叫した。

映し出されるその映像には、母様^{ユーナ}とセリティア女王陛下がにっこり微笑んで握手をしていた。

映像の内容は、婚約発表だった。

特別報道番組的な感じのニュースだった。

ええ、転生してもアニメ大好きっ子のままだつたので、今日も楽しみに見ていた作品の途中で切り替わった映像に啞然。ものの数分も経たずに、絶叫しました。

何ですかコレ？！

母様、嫌がらせなの？ つて、本気で思いたくなるニュースに頭を抱えてしましました。

だつて！ だつて！！

女王陛下の甥で、カグラ・ジーノ・ラグナ、公爵家嫡男と私のものだった。

カグラって、あの時の彼でしょう？

王子って言われるのを嫌がる少年だった、彼。

さぞかし、今頃は美しく育つている事であろう。

そんな彼と私が婚約？ つてなんでやねん！

あの事件以来、10年近く経つていて、一度も会っていないのに！ そんな婚約話も一度だって話題に上った事ないのに！

なぜに、婚約ですか！？

しかも、私に断りなく！

「アーニー、お前がアーニーだよ。」

私は力の限り叫んだ

ジユラーレ魔法学院入学前日の出来事であつた。

「時は無情よね……」「

私は、ラグナリア星のジュラーレ学院都市駅に立っていた。

地下から、地上へ出で、空を見上げると、紺碧の色が広がっている。

本来なら清々しい門出たどいこのに
昨日の出来事が尾を引いている。
気分は海溝に沈んだ感した

唖然とした婚約発表の件は、実はそれだけに留まらなかつた。
問い合わせる私に。

「ナツキの為よ。それと、彼も今年ジュラーレに入るからもし、出会つて恋に落ちても大丈夫よ」

とは言え、名前と性別を女性のままで入学したら、色々と面倒な事になりかねないかもしだいとの事で、魔術で性別を中性体（未分化）にして、名前を父親の姓で名乗る事にした。

中性体（未分化）の身体とは、男でも女でもない微妙な状態の事

で、強い魔力を持つて生まれた者に良く表れる現象で、不安定な魔力が肉体に影響を及ぼす事で知られている。

女性として入学したら同じ名前で勘織られる事も、中性体と言つ身体で少なくなり、ナツキ・ルウイン・アマハは名前を詐称（？）して入る事となつた。

今のは、ナツキ・タカマガハラといつ名前で、女性でも男性でもない変な存在になつてゐる。

ジュリーヌ魔法学院（前書き）

学院についての説明的な感じです。

ジュラーレ魔法学院

ジュラーレ魔法学院のある場所は、所謂学園都市といつものである。

しかも、超広大だ。

このラグナリア星を支える要の魔法使いや魔術師を輩出するのだから、しょぼい訳が無かった。

学院は、二種類の学科で構成されている。

一つ目は、魔法学科。主に魔法や魔術を学ぶ。

二つ目は、宇宙工学科。宇宙船の構造から、宇宙船のパイロットになる為の各種を学ぶ。

入学して最初の1年は魔法の基礎 + 宇宙と宇宙船についてを学ぶ。2年目からは魔法の適正が低い者は、宇宙工学科へと編入していく者も多い。

稀に宇宙工学科から、魔法の適正が高い者が魔法学科に切り替えて学ぶものもいる。

学生にとっては、自分に合った学科へ移動出来るので、実は結構喜ばれている。

入学は基本、13歳から入れて、卒業は特に決まっていない。
魔法学科を全て学んだ後、宇宙工学科も全て学ぶ者もいるくらいだ。

飛び級して卒業する者もいる。

それぞれ一つの棟？と言つか塔みたいな城みたいな感じの建物があちこちにある。

その中央には、寮が存在している。

どの棟に行くにしても距離が平均的になるようにの配慮らしい。

寮はまるでローマの円形闘技場か、絵画のバベルの塔みたいな感じの円形の建物で、真中がくり抜かれて中庭になっていた。

中庭には中央棟と呼ばれる塔が建っている。その棟には、各寮生が共用で使う施設がある。

食堂、浴場、図書室、レクリエーション室などがある。

また、各階毎に、各寮からの通路が通されている。

また、この都市には医療棟（病院）などもあり、実際は最先端の技術がこの都市に集まっていると言つても良いほどだった。

学院と街との境は、大地に横たわる森と湖と草原だった。
その向こう側に街が存在していた。

向こう側の街に買い物に行くには、些か面倒な手続きをしてから学院を出なくてはいけない規則になつていて。

一応、ネットワーク環境は完備されているので通販を使って必要な物を購入する学生も多数いる。

普通に実物を手にとつて買い物をする者には、多少不便な学院生活だつたりする。

まあ、慣れるまでが大変なだけかもしれないけど。

まず新入生は、前日までに入寮しなくてはいけない。
寮の決まり事などを知らなくてはいけないからだ。

大きな建物で下手をすれば迷子になる事必至な、ぱっと見は文化遺産な感じの寮だ。

ハツキリ言って、何を考えて作ったのかが皆目見当がつかない馬

鹿デカイ建物。

イギリスのお城みたいな学校とか、寮とか憧れたけども、いざ自分がその状況になると腰が引ける。
スケール違い過ぎで、前世が小市民気質な自分に叱咤して突撃命令を下す。

寮の入り口は四か所。

東の出入口が、セイリュウ。

南の出入口が、スザク。

西の出入口が、ビヤツ。

北の出入口が、ゲンブ。

そのまま、四分割された建物の範囲が、寮内の名前を冠する様になつてている。

例を出すと、寮の北側の部屋に入る者は、ゲンブ寮の何号室という風になる。

ちなみに、中庭はキリンの庭と呼ばれている。

入口はどこから入つても良いらしく、入寮手続きには「ここから入りなさい」とは記載されていなかつた。

私が居るのは、東側のセイリュウの入り口。

凝つた蒼い龍の意匠が施された木の扉が、左右に開かれている。
入口には、A5サイズくらいの超薄型ディスプレイ端末を持った人を含め、男女5人が立つていた。

私は、彼らの前まで行き、ぺこりとお辞儀をする。
「初めてまして、ナツキ・タカマガハラです」

「ジュラーレ学院へようこそ」

顔を上げると、二つ巴の笑顔で私を迎えてくれる。

「二郎がこれから私が住まう、場所なんだって思うと少しだけ鼓動
が速くなつた。

どんな風な部屋なのか？

どんな内装なのか？

どんな人達が居るのか？

馴染めるのかどうかも、不安だつた。

でも、二郎には、お祖父様もいるから時間が有る時に会いに行こ
う。

今まであまり会えなかつた分、沢山話せたらいいなあ。

期待と不安を胸に、私は踏み出した。

ジュラーレ魔法学院（後書き）

入寮の一幕でした。

早く本編キャラ出したいのに、説明があるので少しあしかかるかな？

キャラ設定（前書き）

ネタバレ含みます。お気を付け下さい。
とりあえずは、こんなヤツラが出ますよー的な設定です。（笑）

キャラ設定

ナツキ・タカラマガハラ（ナツキ・ルワイン・アマハ）この物語の主人公。

魔法界の女帝の娘。

混乱を避ける為に、苗字と性別を変えてジュラーレ学院に入学。

魔法属性は、^{ブレイク}破壊

前世は不憫な娘の愛花。

ふわふわの金髪・瞳はエメラルド・肌は陶磁器のような白・身体つきは華奢。

カグラ・ジーノ・ラグナ ラグナ公爵家嫡男。

学園の入学直前に、アマハ家の娘ナツキと婚約する。

ラグナリア星皇家の第2皇位繼承者。

魔法属性は、^{グラビティ}重力

銀茶色の髪、紫の瞳を持つ。

母により7歳から騎士団に入れられて、15歳になりジュラーレ魔法学院に入る直前まで騎士団在籍。

リョウ・セイレイイン カンサイ地区の富豪の息子。

魔法属性は、雷。

長めの黒髪を右肩で緋色の紐で括っている。瞳はアイスブルー・肌は象牙色。

訛りのあるカンサイ弁を喋る。

レーツェル・エスパーク 騎士を多く輩出しているの子爵の家系の息子。

カグラとは従兄弟同士（二二の兄の息子）である。エスパーク家は、カグラの母二二の実家。

魔法属性は、付加^{アディス}。剣などに付加価値をつける。

銀髪、銀蒼色の瞳。

カグラと同期に（7歳）騎士団に入る。15歳になりジュラーレ魔法学院に入る直前まで騎士団在籍。

カグラの専属騎士である。

セアリーナ・リース 白の魔法使い。

ラウリウスと婚約中。リース国第四王女。

出身：リュイア星

ラウリウス・リコート・ディナ 火の魔法使い。

シアーナと婚約中。ディナ国第一王子。

出身：リュイア星

ザーカト星出身メンバー

シノブ・イグニス・ヒエラクス 焰の魔法使い

カイ・ルス・リュンヌ 水の魔法使い

ショウ・アフト・クラトル 光の魔法使い

レイ・ヴァンオー 風の魔法使い

ティア・ルス・リュンヌ 水の魔法使い

ザーカトは、女性の人数が総人口の1割で、一妻多夫制で男性同士の婚姻を認める珍しい惑星。

惑星の性質上、女性が産まれ難く、DNAも弄る事が出来ない特殊な環境。

ラティーナ・ルー 癒しの魔法使い
ダーク・レイズ 閻の魔法使い

ユーナ・アマハ ナツキの母で魔法界の女帝で、ジュラーレ学院長。
基本元素属性（地・水・火・風・空）を扱える。

レオン・ルシェルシユ・アマハ 婦養子で、宇宙考古学者。
娘を溺愛していく、息子と良く取り合いをする。
魔法属性：探索サチ

コウ・ルワイン・アマハ ユーナの息子で、ナツキの兄。現在、家出中。

ナツキと10歳違い。

妹ラブ！の暴走あほの子になつてゐるシステムの美形お兄様。

魔法属性：合成：練金アルケミー

ルワイン・アマハ ユーナの父親で、ジュラーレ学院・現理事長。
現在、用務員兼庭師として学園にこつそりいる。

魔法属性：守護ガード

ラピス

瞳と長い髪は瑠璃色の中性的な美人

スター・シップ
宇宙船リュシオルのメイン知能でもあり、宇宙船そのものでアンドロイド。

星皇（惑星君主）現在女王

セリティア・ラグナリア 星皇家

髪は銀茶色、紫の瞳、肌は真珠のような白。

魔法属性：火焰フレイム

ラグナ公爵家

テンリ・ジーノ・ラグナ公爵家現当主で宰相閣下
ラグナリア星皇家の第1皇位継承者。

髪は銀茶色、紫の瞳、

ニーナ・ジーノ・ラグナ カグラの母

副騎士団長

シエン・シア・メーディカ 王宮治療師（医学）

髪はピンク、瞳は水色、身長は高い。

極彩色の膝丈までの長い服を着て、革のサンダルを好んで履いている。

魔法属性：^{クリア}透視

キャラ設定（後書き）

突然変更等が入る可能性があります。ご了承ください。

ザーカトは、夕焼けです。

鍊金術と魔法と究極な取引

世界は何時も閉じられた、閉鎖空間。
沢山の管を身体に付けて、ベッドに横たわったまま。

何の為に生きているのだ？

何でこんなに苦しんで生きているのだ？

何よりも自分を思つてくれている人達に負担を掛けているのだろう。

介者の中を慈しんでくれる家族にはまないと毎日思つ。

ただ、自分に出来る事は酷く少ない。

毎日笑顔を見せる事も出来ず。

か細い呼吸をして、命を繋ぐだけ。

この厭わしい身体を捨てて、バイオロイド化出来ればいいのにと思つ。

バイオロイドは人間の脳とその人間の使える一部の細胞や臓器などを生体と機械を融合させて、半androイド化させるようなものである。

成人のバイオロイドを作るだけで、小さな国の国家予算並みの莫大な金が必要になるのも事実だが。

とは言え、今の自分では、生きている部分が脳と皮膚だけになってしまふが、この19年間ベッドだけの閉鎖空間に比べたらそんな事些細なことだ。

動けずただひたすら苦しいのを我慢する毎日と、動けて物を触つ

たり出来る日々は途方もない幸福だ。

家族達もまたそれを望んでいるが、この死にかけた身体を維持するだけが精一杯だ。

そう、それだけの貯えが家には無いのだ。

疲弊し掛けた家族達に苦労はもう掛けたくない。

死を待つだけの毎日ならば、いっそ殺してくれと思つ。

そんな日々の中、家族と病院関係者以外の来訪者が訪れた。

「初めまして。ソード＝ケー・ミィーヤア」
につこつと笑う青年に驚き、正直戸惑つた。

この部屋以外の外を真の意味で知らないので、美貌の基準は良く分からぬが、恐ろしく整つた顔立ちの青年だつた。
ベッドの脇に置かれた椅子に座つて彼は切り出して來た。

「俺の名は、コウ・ルワイン・アマハ。單刀直入に言つが、君に取り引きを持ち掛けに來た」

「取り引き？」

「ああ。君にどつては悪い話じや無いと思つが、君の両親は君の気持ちを尊重すると云つた事だつたので直接話に來た」

「どんな内容ですか？」

「君は、バイオロイド化を望んでいると言つた話だが、それに間違はないかな？」

「ええ、望んではいますが……夢物語でしかないですけどね
僕が自嘲気味に笑つと、彼はじつと僕を見詰めていた。

そして、一拍置いて、彼は口を開いた。

「夢物語でないとしたら、君はその話を聞きたい？」

「えつ？」

「但し、それ相応の条件があるがどうする？」

「そんな話有る訳がつ！」

「そうだね。そんな話、普通は無いね」

「実験台つて事ですか？」

咄嗟に思い浮かんだのは、テスト的な被験者を探しているとかだつた。

「いや、違う。ある人物の護衛と言つか、監視とでも言つかかな……その人に危険が及ばない様に気を付けて貰いたい」「でも、僕の体を見ての通りの状態ですよ？」

「護衛に就いて貰う期間は数年間、大体5年ほどになると思つ。その間は動物の形をした身体のバイオロイドに入つて貰う」

「ええつ！？ 人型じやないつて、人型のバイオロイドを作るのだつて相当なお金がいるのに、それ以外も用意するつて事ですか？！」

「ああ、君が望むバイオロイドの身体が出来上がるまでは違う身体に入つて貰い、且つ対象を護衛監視して貰うのが条件だ。これを遂行してくれるのならば、君が望む年齢から普通に年をある程度経て相当する年齢の外見のバイオロイドをその都度用意しても構わない」

「なつ……それは、大国の国家予算並みになるんじや……ぎょつとしている僕に、コウは平然と答える。

「そうだね、その位はいくだろうね。でも、それよりも守らなければ

ばならないんだ。なんとしてでもね。だから、必ず護衛をしてくれ
る者が必要なんだ。君はそれに適う存在だと思うから……」

強い意志を宿した瞳の彼に一切の偽りが無い様に思えた。

「貴方は一体どういう人なんですか？ 国家予算並みの大金を動か
せるなんて常軌を逸していると思えますが……」

「まあ、普通にバイオロイドを発注したら国家予算はいくだらうけ
ど、バイオロイドやアンドロイドを作成しているグループ企業があ
るからその辺は安心していい。ちなみに、俺の祖父は宇宙に1つし
かない魔法学院の理事をしているよ。名前、聞いた事はないかな？」

「こりと笑って言うコウに、僕は更に彼を凝視してしまった。
「ジユラーレ学院ですか？ 魔法適性が無い者は入れないと有名な？
「ん、実際は魔法適性なくても宇宙工学科には入れるんだけどね。
巷では魔法適性の方で知られているのか……」

「ええ、魔法は限られた者しか使えない秘法とも言われてますし、
魔法使いの乗つた宇宙船は加護あるつて言われてます」

「とは言え、魔法は万能じやないよ。守りたい者を確実に守れる訳
じやない。だからこそ、君の助けが必要なんだ。この依頼受けてく
れるかな？もし受けてくれるなら、君の望みを叶えるよ」

「その言い方ですと、危険はあるかもしけないって事ですか？
含みを持った言葉に、そんな気がして問い掛けた。

「多少はね、あると思う。だけど、それを回避する術を仮の身体に
組み込むし、あくまで君は護衛対象を監視し、もしも危険が及んだ
時には知らせてくれるだけでいい」

「……」

黙り込む僕に、「ウは小さく苦笑する。

「1ヶ月後に答えを聞かせて欲しい」

そう言って彼は去つて行つた。

僕にとって、18年という歳月は長かったのか、はたまた短かつたのかは分らない。

分るのは、狭い世界で生きて来たと言う事実だけだった。

そして、苦しんでいた日々と別れると言つ事は、僕の為に苦労をしてきた家族を解放出来る事。

この先、生身の身体が惜しかったと思える日が来るのかは分らないが、先が無い未来を選ぶつもりは無い。

そうして 僕は、未来を選んだ。

鍊金術と魔法と究極な取引（後書き）

新キャラ登場です！（笑）
言わざと知れた、ナツキの護衛となります。
どんな姿なのかはお楽しみって事で、次回に続きます。

お部屋はスイートルーム

支給された身分証明ID兼部屋の鍵を左手握り、右手には厚さ3ミリの携帯ディイスプレイ端末を持つてのんびりと階段を昇る。

キーは半透明なオーロラの様に光る金属で出来ていて、キラキラ光つて綺麗だった。

10センチの長さで、先端に穴の様なものがあり、そこに鎖とか紐を通してネックレスやストラップの様にして大半の生徒は持つていると寮長は説明してくれた。

でもってこの携帯ディイスプレイ端末は、スマホよりも薄くとても軽い高性能PCのよくなものであった。

厚さ3ミリで、幅10センチほどで高さ15センチほどなことつても軽い。

前世で持っていた携帯電話より、3分の1の重さ程しかないと思ふ。

音声識別認識も出来、私が「部屋へ案内して欲しい」と言えば音声で案内してくれる。

音声は好みでオンオフ可能だし、これ一つで星間チャンネル（宇宙間電話みたいなもの）も掛けられたり、ノートの代わりも辞書機能やらの何でも機能付きで至れり尽くせりの一品です。

これは生徒に必ず支給される物だそうで、失くしたら実費で購入しなくてはいけない。寮長からは「これは高い物だから失くさない様に気を付けて」と注意された。

また、寮の規則、学院の校則などなどもこれに入っているので、

読んでもおく様にとも告げられた。

『どうぞ、用子で渡されたら、面倒臭いなあつて思つていたのう』
ツキ・だ。

『しかし、一体誰の趣味なのかなあ？』

私は、口々口調な階段や廊下を歩きながら眩きながら、端末に向かって問い合わせてみる。

『ねえ、Jの寮はどんな意図で、デザインされてるの？』

『お答えします。Jの寮は遠い銀河にある惑星にある各地の建物内部をモチーフにして作られており、4つの寮の内部はそれぞれ違う内装となっております。デザイナーが長い学院生活を少しでも楽しめるようとの配慮と遊び心で作ったそうです。』

『……もしかして、地球？』

『はい。その通りです。その惑星に降り立った者がここへ戻つて来て陣頭指揮をとつて作りました』

『えつと、そんな簡単に行ける星なの？』

『いいえ、行けません。かの星は、内乱などが多く、我々の技術レベルにも達しておらず、コンタクトをとる事は禁止されます。ただし、毎年数名限定で調査のために行く事は許可されています。その星の人間として擬態する事が義務付けられます』

『戦争無くならないんだ……』

『はい、戦争をしない地域もあるのでそういう場所に調査隊を派遣します。そして、その文化に触れて触発された学院の卒業生がこの寮をデザインしたのです』

端末が答えた後、ピピピピと電子音が鳴る。

『お部屋に到着しました。IDをお出し下さい』

キーを出すと、プレートの底の部分が淡くぴかぴかと青白く光っている。

目の前にある木製にも見える扉に施された植物の模様にはめ込まれた、青い石の様なものが同じように光っている。

『キーを光っている部分へ当てて下さい』

言われた通りにキーを石の部分に近付けると、カチンと軽い音がした。

『施錠が解除されました。寮生の認識を登録しますので、手を先ほど光っていた部分に軽く押し当てて下さい』

「……えっと、手のどの部分でも構わないの？」

『はい、指先でもどこでも大丈夫です』

私は端末とキーを左手で一緒に持つて、右手の平でべたつと触れてみる。

木の様に見えていた扉は、不思議な材質な感じだった。
実際には木ではあり得ない感触、金属の様なものだった。

『ナツキ・タカマガハラを認識しました。お入り下さい』

扉が音声を出し、シュインと機械音がして扉が右から左へ開く。

部屋に足を踏み入れると、そこに広がるのは……。

白を基調とした壁には、細工された模様が施されてセンスの良さが伺える。

が。

入つて直ぐの室内は、じつかのお城の如くなアンティーク風机や椅子。

そして、ソファーやテーブルどもこれも、くるるとした脚線美を持ったデザインの家具だった。

寝室は、ロイヤルスイート感漂う豪奢な天蓋ベッド。

「どこのホテルよ?」
「はー!？」

浴室も豪華かと思つたら、意外や意外簡素なシャワー室だった。

まあ、共同浴場は、中央棟にあるのでそこはきっと豪華なんだろうと思つ。

口からお湯を吐くライオンなんぞがいそつだ。

黒い箱から出るのは？ 悪夢。・希望？

一通り、室内を見回った後、気付く。
ソファーとセザンのテーブルの上に、ひょこんと載つている箱だ。

「……？」

近付いてみる。

「コンピュータ、これはなに？」
室内に問い合わせる。

すると。

ピピと電子音と共に回答が返つて来る。

『はい。これは我らがマスターよりのナツキ様宛のお荷物です』

「我ら？ マスター？」

『我らと語つのは、寮を統括する管理脳や、この学院全^{コンピュータ}てを管理する統合管理脳を御造りになつた創造主とも語つべき御方コウ様です』

「あ～。兄様ね」

『はい。そうです。また、私の事はエデンとお呼び下さい。学院の統合管理脳はヘブンとお呼び下さい。緊急事態の際は、直接、我らに繋がります。通常の際は、コンピュータと問い合わせて構いませんし、トラブルで何所かに閉じ込められたとしてもその名で呼び掛けられたら我らは必ず応じますので』

うわー、兄様過保護過ぎ。

そうは言つても、前科があるからそこまでしてもきっと、し足りないんだろうけどね。

これは保険その一つでトコロだらう。

だとしたら、箱の中には保険その一がある可能性が高い。

「……」

箱を凝視する。

大きさは大体だけど、高さと幅40センチくらいの抱えて持ち運べる位の箱。

黒い金属の様な切れ目の無い箱の中央に、銀色の5センチ四方のプレートが嵌つている。

このプレートは、識別プレート呼ばれる物で対象者を認識する小型コンピュータである。

人差指で、銀色の部分をタッチする。

すると、プレートを起点とし上下に光が走る。

光が走った部分が、パカッと左右に箱が勝手に割れる。

「えつと……」

中にはちょこんと座つたニヤンコみたいな黒い物体が、目を瞑つた状態で招き猫の様に鎮座している。

口元には、クリアカラーのアクリル板の様な物を何かを咥えている。

兄様からのメッセージカードなのは分つた。
それに、ちゃんちゃんと指先で軽く叩く。

透明なカードが、銀色に光る。

『起動を開始します』

と、金色の文字がプレートに浮かぶ。

「……」

すうっと、ニヤン口の田が開く。

ぱちぱち瞬きを数回するその姿は、可愛い。

首を動かし、私にプレートを受け取れと言ひ仕草を示す。手を出すと、咥えていたそれをポトリと落とす。

手の中でプレートが強く輝き、プレート状に小さな3Dホログラムが出現した。

その姿は、間違いなく私の兄様。

「ナツキ、入学おめでとう。兄様からのプレゼントを同梱しておいた。受け取ってくれるよね？ もし、困った事があれば彼に言つて良い。彼には、俺の緊急回線ホットラインを教えてある」

彼？

彼つて事は、このニヤン口がやんは男の子と言ひ事なんだ奴だ。

「詳しい事は彼に聞くと良い。また、学院、寮生活は大変だと思つが、まずは困つたら学院内にいるお爺様に相談する事を忘れないようにな。あと！ 兄様は、皇太子候補との婚約は反対だから本当に嫌だったら言うんだよ！？」 その時は、何所へだつて逃げてあげるからね！ だから

ぺちん。

右手でプレートを封じて起動を強制的に止める。

放つておけばどこまでも、延々と言いたい放題言つのが分つていたので思わず停止。

「兄様……」

心配なのは分るが、第三者（？）が居るのを分つていてシスコン振りを披露するのは勘弁して欲しい。

「初めまして。ナツキ様」
にやんこが、じつとこちらを見詰めて口を開いた。

口から出たのは、予想通り「はやあー」ではなく、人の言葉。

キタ――――――!

兄様の保険、その一だつ――――

黒猫ではありません。黒豹です。

「初めてまして。私の事は知つていてるのね？」

そう問い合わせると、丸い黒曜石な目が私を見上げる。長い尻尾をフリフリする、愛らしい姿に思わず撫で撫でしたくなふのを堪えつつ回答を私は待つた。

「うん、知つてる」

やつぱり、口から出るのは「にゃー」ではなく、キャラメルチックなヴォイスの少年の様な高い声。

「んと、訊いても良いかな？」

「ど～ぞ～」

「私の名前をど～ぞも知つていてるの？」

「うん、知つてる。『ウガ』が知つてる事は殆ど教えてもらつていてるよ」

「そう、なら自己紹介は省いても良いわね？」

「イイヨ～」

「じゃあ、次の質問ね。貴方の名前を教えて」

「ボクは、ソード＝ケー・ミィーヤア。ソードって呼んで」

「ソードね。分つたわ、私の事はナツキつて呼んで構わないわ。それで、貴方は何故その身体にいるの？」

「取り引きだからね。まあ、面白い体験だから楽しんで黒豹ライフをしようと思つてんだけど何か問題ある？」

「ん？ クロヒョウ？ 黒猫ではなくて？」

良く見ると、黒い毛並みに斑模様があるよつた？」

要するに子供の黒豹の身体と言つ事が。

「え？ 黒豹なの？」
まじまじと見る私に。

「うん。 そうだよー。 子供の黒豹だから、ぱっと見ただけじゃ猫と
変わんないし疑われないでしょ」

「うーん……でも、大丈夫なの？ 察内に動物が居るのって規則違
反にならない？」

「あ～、その辺に抜かりはないよ～。 何てつたって、理事長が1か
月前から飼つているって事になつてるから」

「……それは、確かに誰も逆らえないかも」

「何所に入ろうが、フリー・パスだよ。 まあ、調理場とかは衛生上駄
目かもしれないけどね。 基本的には、問題なし」

「でも、疑われない？ 理事長と私の関係とか？」

「まあ、四六時中ナツキに張り付いていたりしたら怪しまれるから、
適当にあつちこつちに行つて愛想も振り撒くし、一応ネコ科の氣ま
ぐれで好きなようにさせとおく事が通達されているから大丈夫だと
思つよ～」

ソードはそのままびりと答えて、かりかりと右前足で頭の天辺を
搔く。

やだつ、そういう仕草すると普通のニヤンコに見える！
さ、触りたい！ 出来る事なら、抱きしめたい。

だめかな？

「ねえ、さ、触つても良い？」

私がセリフ讀うと、きょとんとした瞳を向けてくる。

首を少し斜めに傾げた仕草も可愛い。

不自由が無い生活が長いけど、動物と触れ合つとかは一切無かつたので猫とか触れたくてウズウズしてしまつ。やつぱり、前世での動物好きの本能が湧いてしまつそうだ。

「……もしかして触りたいの？」

「……うん」

「あ～、もうくるよね～」

素直に言つた私に、困つた様に右前足でもう一度顔をカキカキしながらソードは言つ。

「ん、まあ、いいよ

「わあっ。ありがと～」

手を伸ばし、黒い毛並みをそつと撫でる。

うわー。柔らかい！

温かいし、普通の動物と変わらない感触。
この身体の中身半分は機械なんて思えない。

ん？　んんん？

あ、私完璧に話を脱線させちゃつた？

あーん、でも、このもふもふ感！　堪らないつ！

撫で。

撫で撫で撫で。

はつ！！

いかんいかん！

トリップしてる場合ではないんだつた！

「え～と……訊きたいんだけど良いかな？」

後ろ髪引かれつつ、私は手をソードのおでこから離して問い合わせた。

「なーに?」

「兄様との取り引きってなー?」

「簡単に言えば、身体かな」

カラダ!?

一瞬B-Lネタが過った自分に突っ込みを入れつつ。

「身体つてバイオロイド?」

「そう。以前の身体はポンコツでね、ずっと寝たきりだったんだ。
そこに『ウガ現れた』

「……酷いつ」

反射的にそう思った。

どうにも出来ない状況に交渉を持ち掛けるなんて、脅迫と変わらないじゃない。

「酷くなんかないよ。ボクにとつてはチャンスだつたからね。君を卒業まで見守れば、望む身体が手に入る。本来なら一生掛つても手に入れる事が出来ない身体を」

「だからって、兄様つてば何を考えているの。こんな危険なまねをさせるなんて！」

「あ～、危険なのは知ってるよ。ナツキのじ両親にも頼まれたしね
「え?」

「危険なのは承知の上だよ？ それに、その危険性も考慮に入れて布石も立ててある。まあ、価値観の違いだから解らないかもしけないけど。ボクはこの生活を楽しんでるんだよ」

「でも……」

「ボクにとつてちょっとスリリングでも死しか見えない箱の中で生きるより、今は自由で幸せなんだよ。だから否定しないでよ」

黒曜石の瞳がじっと見つめる。

彼なりの人生から学んだ、それが答えなんだ。形は違うが否定される経験を知っているから解る。それそれが望む幸福。

無茶をしてでも掴み取りたい未来があれば、選ぶしかない。彼の決意を、選択を、否定しては駄目。もう後戻り出来ない状況に彼はいるのだから。

「うん、解った。卒業するまで、私と仲良くして下さい。出来れば友達になってくれると嬉しいな」

「へ？」

「ダメかな？ 笑われるかもしれないけど、私ずっと宇宙船暮らしとかだったから友達いないの。だから、初めての友達になつて下さい」

右手を出して、正直な気持ちを口に出してお願いする。

「……………あらがとう」

ソードはそう答えると、前足の肉球の部分で私の右手テシテシして応じてくれる。

その姿があまりにも可愛くて、抱き上げてぎゅっとする。

「うんー、もうしくねー」

「アロシク」

ソードの表情は解らないけど照れたのかもしだす、抱き上げた私の肩を肉球でぽすぽすしていた。

仕込みはばつちつ？

豪華な廊下をしてくと歩く。
私の足元では、黒猫にみえる黒豹のソードがトヲトテトニテと付いて回る。

あう〜。可愛いな〜。
思わず顔が綻ぶ。

「にゃああ

目が合つと、ソードが鳴く。

何だよつて返事をされた氣になる。
たぶん、間違つてはいなうだろう。
外では猫として振舞うと言つていたので、その通りの反応だけど
ね。

一人（今は一匹だけど）して、階段を使って一階へ移動する。
建物は10階建てで、各階への移動手段はエレベーターと階段の
2つだけど、この階段は音声認識でエスカレーターとなる。
基本的には稼働していないので、上に乗つた後『3階へ』と言え
ばその階まで移動してくれるという優れもの。
自力で行くのを好む人は、そのまま上がつて行けばいいと言つ才
法だ。

ちなみに私の部屋は2階にある。
ソードの出入りは、窓からでも樂々な位置の部屋もある。
まあ、家族の誰かが手を回してこの部屋に決めたのかもしれない

けど。

職権乱用はどこまでいくのかを考えたら、ちょっと頭が痛くなるわ、ホント。

まず一番に散策する場所は、各寮で区切られた中庭だ。窓から見えた庭が、凄かった。

イングリッシュガーデンぽい感じの作りだったので、お茶会したら映えそうと思ったのでじっくり覗いてみないと素直に思った。事前情報で、それぞれの寮の区切り毎に庭も違うらしいとの事を聞いていたので興味が湧いていた。

あと、お祖父様から「入寮したら中庭を必ず見においで」と言わっていたのもあるので、最初は中庭に探索するのを決めていた。

当初の予定と違つのは、黒豹のソードがナイト役を務めてくれることかな。

勝手知つたる我が家っぽい足取りの一ヤンコ風な彼。

てとてとてと……と歩いていても、寮内にいるすれ違う生徒の殆どは気にしていない様子が見てとれた。

どうやら、箱に入つたのは仕込みみたいなものだったようだ。兄様からのメッセンジャーとして懶々箱に入つて、自己紹介したつてワケみたい。

中庭へと続くドアは、木製風の扉ではないが不思議な文様で細工されている。

取っ手らしき箇所に手を触ると、シャイインと自動にドアがスライドして開いた。

外に出ると、石畳と緑の絨毯で出来た小道と植えられている花々が出迎えてくれた。

「わあっ……」

私は思わず感嘆の声を上げる。

今のは、本物の植物に触れる機会は少ない。

だからかな、前世で見た時よりも何故か物凄く感動した。
花や草木の匂い。

さわさわと音を立てる植物たち。

なんか、良いな。こういうの。

晴れた日はのんびりここで、一日ぼーっとしてみたい。

和む。

癒されそうだわ。

「うにゃああん」

前を歩いていたソードが振り返り、私を見て鳴いた。

そして、てててと軽い足取りで先を進む。

「ん？」

私は早足でソードの後を追う。

薔薇のアーチを抜けると白い東屋が建つていて、そこの近くに座り花の植え替えをしている作業着を着た庭師らしい人が一人いた。ソードはその人に寄つて行き。

「にゃー」
と挨拶をする。

「おお、ソードかい。元気か？」

背中しか見えないけど、老齢な男性の声が耳に届く。

「うにゃー」

元気だ！ と宣言するかの如く答え、私の方へと駆け寄つて来る。

「いや、いやー、いやあー」

何かを告げる様な、鳴き声を上げる。

作業をしていた人が立ち上つて、こちらを向いた。

好々爺した老人が。

茶色い髪と翡翠色した瞳を持つた、見知った人が穏やかに笑っていた。

おおおおおお、お祖父様！！！

なななななななな、なんで！！

こんなトコロで庭いじりなんてしてゐるお――――！

好感のもてる女性でいましょう。

危うく叫びそうになつた私は、自分の手で唇を抑えた。
そんな私の苦労を知つてか知らずか、お祖父様はにこやか～に
好々爺然と話しかけて来る。

「やあ、初めまして、お嬢さん。新人生かな？」

「は、はは、はい……」

「この庭は気に入ってくれたかな？」

ホクホク顔で話しかけて来るお祖父様に、私は僅かに顔を引き攣らせつつ答えを選んでいく。

「え、あ、はい。素敵なお庭ですね」

「そつかい？　この中庭は儂が丹精込めて手入れをしているのでな、
そう言って貰えると嬉しいねえ」

「あの……お爺さんが全てお一人で行つているのですか？」

「そうだよ。理事長に一任されていてね、自慢出来る庭にしている
んだよ」

心底楽しそうに笑いながら、そのまま現理事長まよじこうじやう。

自分で自分に任命してるとて事？

要是は自分の趣味つて事ですね、お祖父様……。

……つて事は。

知らぬは生徒ばかりなりつてコトかな？

知つていたら、理事長が丹精込めて作つた庭を荒らすような輩おばながれんの
為にも一応告知はされている筈だ。

その告知がされていないのは、何か思惑があつてつて事だらう。

知らないで荒らしたら、即退学とか？

でも何かしらのペナルティーはあるかもしねない。

うわー。あらゆる意味で気をつけないと、大変かも。

「どうにトラップ紛いのモノが仕掛けられてるか解ったものではない。

キレイで何かに当たるのは、危険かもしねない。

気を付けなきゃ。

「気に入ってくれたなら、ゆっくりして行くと良い」

にこりと笑う、お祖父様。

「あ、ありがとうございます。凄く和みそうな庭なのでビックリしました。何時来ても良いですか？」

「ああ、どうぞ。お嬢さんに褒められるのは嬉しいものだね。儂にも孫娘がいるのでな、孫に言われてるようでとても嬉しいよ」

「そ、そうですか……それは光栄です。えっと、あの、良ければお仕事見ていても良いでしょうか？」

他人を装いつつ会話するのは、大変なので取り敢えず話題を強引に振つてみる。

お祖父様は一瞬不満気な瞳になるが、何か思い付いたのか笑顔に変わる。

「おお、お嬢さんが良ければ花の種類とかもお教えしますよ。あ、土に触るのは苦手かい？」

「あ、いえ、大丈夫です。殆ど触つた事が無いのですが、興味はあります！」

厳密に言えば「前世では沢山あるが」と前置きがつくけれど。

のほほのーんとした雰囲気になりかけたところだ。

「ちゅうとー そこの庭師つ！」

金切り声の女の子の声が、雰囲気を切り裂いて現れた。上等な服に身を包んだ少女は、じかうをじりりと睨みつけている。

「儂に用かな？」

不機嫌感びしばしな彼女の視線を物ともせず、お祖父様は平然と訊き返す。

「ここの庭に虫がいるわ！ 全て駆除しなさいー。」

「はい？」

私は思わず、声を漏らす。

虫、普通にいるのが当たり前だよね？
何を言つてるんだ、この人は。

「ここのは、有機農薬でやつしていくな、化学薬品を使わない事が決められているんだよ。出来るだけ自然な状態でと理事長からの通達なので虫がいるのは当たり前ですよ」

にこにこ笑顔で、お祖父様が答える。

「そんなの関係無いわ！ 私を誰だと思っているのー？ 庭師が逆らえる身分ではないわよー！」

自分が偉い、自分が有利なんだと言つ迷惑極まりないジャイアーストは、叫んで宣言する。

もしもーーし、暴言止めてえー！

アナタ、即退学になっちゃうよ？

生徒の運命をかるく扱える人を相手にしてますよー。

「ちょっと、それは横暴じゃないかな？ 理事長の言葉より、貴方の言葉が重いっておかしくない？」

「何よ！ あなた、私を誰だと思っているの…？ 私はこの星の財務大臣補佐の娘よ！ あなたなんかよりも偉いのよ！」

「……」

説明しよう！

この星の大臣は独身（子供がない人）が、なれるという独特的の規定がある。

なので、子供を認知していようがいまいが関係なしに対象外になる。

子供がいる者は、出世をしても補佐止まりと言う訳である。

権力を集中させない為の措置で、且つ国民誰でもが大臣になり自分の中を良くしようと努力が出来るのを目的としている。

だからと言って誰も彼もが大臣職に就けるわけでもないのだけれどね。

それでも、一部だが、勘違いした特権階級を重視する者もいるのは事実で、彼女はその部類だと思う。

けれど、ここでは ジュラーレ学院では、通用しない。
身分は関係無しの実力主義でもあるのだから。

規則を破る者には、かなりキツイ罰則などもあるらしいと兄様から聞いている。

身内とて容赦しないのに、マズイでしょ。 それは。

「あの～、勘違いしているのではないですか？ この学院の入学試験の時に、生徒に権力はなく、身分は平等な生徒だと言われましたよね？ 真っ向否定は不味いと思いますよ」

のんびつ口調で、じつめんべうせき口をしてみた。

さつへ亟つて、逆撫でしそうだしねえ……。

「あなた、私がさっき言った事解らなかつたの！？」
「いのよ！」
私のパパは偉

顔を怒りで染めて私を睨む

11

私は呆然とするしかなし。

大丈夫か？この人。

一体どういう経緯で入れたんだろうが、この学院に預けられた。さうして、ココロもやがて、少しうらうけ

頭の脳髄を二か八枚に二口りないんが多いと
じるのかな。

心の中でため息を吐く。

「そこの庭師にもう一度言つわー！」の庭の虫を全て駆除して、完璧な庭になさい！

お祖父様を指差して、傲慢にも命令をする彼女に私は血の気が引いた。

「それは出来ません。それでもそうしたいと言つのでしたら、学院長や理事長を通して申請して下さい。の方々がそれをお認めになることは叶一ませんが」

笑顔で応対するお祖父様。

うひいいいい。

え、え、笑顔が怖い——つ。

目が笑っていないよ~~~~。

「庭師風情が私に口答えしてつー」

つかつかつかと、一ちらに歩いて来る。

あ、ヤバい感じだ。
頭に血が上ってるわ。

「……」

すつと、お祖父様と迫り来る彼女の間に私は移動した。

「何よ、あなた。どきなさいよー」

顔を真っ赤に染めて睨みつける彼女に。

「考え無しの行動は止めた方が良いです
最後通告をする。」

「平民のくせに、口答えするんじゃないわよー」

冷静さの欠片もなく、罵倒する彼女に辟易しそうだ。

平民つて……貴方の尺度でいくと、私の方が上つて口トジゃない?

一応、時期王太子の婚約者よ、私は。

控えるのはアンタよーって、言つたら面白そうだけどなー。
ま、口が裂けても言わないけどね。

いずれにしても、この場でお祖父様に何かしたらもう洒落にならない。

どんなに頭がヨワヨワでも、お祖父様を敵に回すとどこまで波及するか解らぬもの。

こんな子の親戚ってだけで、巻き込まれる方は可哀そーだ。

「じきなさいよー。」

「いやです」

「~~~~~つ

ぶるぶるぶると震えて、彼女は私に掴みかかづつとする。

ザンツー！

田の前に、ぎらりと光る物が割って入る。

「ひつ！」

真っ赤な顔が一瞬の内に真っ青に変わつて、彼女はぺたりと地面に座り込んだ。

「え……！？」

眼前にあるのは、銀色に光る刀身。

切れ味抜群そうな、剣の刃。

その先を目を追つていいくと……柄を持っているのは、風に柔らかく靡く銀髪、陽光に煌めく銀蒼色の瞳の少年だつた。

好感のもてる女性でござります。（後輩）

新キャラ登場！です。

自爆したら何も残らない。

「はい、そこまで！ 有難うレーツェル、助かつたわ」

パンパン！と手を叩く音と共に割つて現れたのは、身長は高く、瞳は綺麗な澄んだ水色で、顔の造形はとても良いが、何故か髪はど

ピンクで極彩色の派手な服を身に纏つた男性だった。

何所かで見た事のある人……と、ぼんやり回想出来ない。

それはもう、ドコと言うよりも。

殺されたけたあの日に出会つたアノヒトだ。

忘れる事が出来る人がいたら知りたい位に、存在感のある彼だった。

シヨン・シア・メーディカ（オカマっぽい人）でしょ、この人。あの日より殆ど老化の兆しが見えない位に、同じ顔だった。

父様と同じ年齢なのに、どんな方法でその顔を保つているのか聞きたくなる。

その言葉を聞き、レーツェルと呼ばれた銀髪の少年は刃を鞘に収めた。

「驚かせてすまない。シヨンに止める様にと言われたので強硬手段に出させて貰つた」

「はあ……そうですか。ちなみにその剣は本物？」

「そうだが？ ああ、知らないのは無理もないか。僕は、レーツェル・エスパーク。皇族に仕える騎士で、帯剣を許されている。使う必要のない時は、別空間に剣を仕舞つている。こんな風に」

私の質問に合点がいって彼はそう言つと、ポンとちょっとだけ空

中に剣を上げるとフツとそれは一瞬でかき消える。

「本来ならば学院への持ち込みは制限されるのだが、あの剣は僕のマジックアイテム魔道具なので許可されているから違法ではないよ。一応、緊急事態と言つて許可はシエンから出ているからね」

にっこりと微笑みを浮かべて、レーヴェルは回答する。

「アタシはシエン・シア・メーデイカ。治癒魔術の教師で、この寮の寮監よ。申し開きがあるならそっちで聞くわ。パーム・グラニット

へたり込んでいる彼女の隣に立つと、シエンは強い口調で言い放つた。

しかも、田がマジだ。

冷たい表情で、正直おつかない。

そして、流石と言つていいだろう、パームはむつとした表情になり立ち上がる。

「何よ、それ、私が悪いと言つの?!

横柄な態度で言い放つ。

「ふふふふ……パーム、アンタ違う意味でも凄いわね。ある意味称賛に値するわね。このアタシにまでそういう態度とはね」

地を這うような嗤いと侮蔑する様な贅辞を送るシエンに、マジで私は怖いと思つてしまつ。

「そりやあ、そうだろ? ものさし自分の世界でしか物事や他者を測れないんだからな。シエンが、治療魔術省の大臣だつて知らないのは、愚か者の極みだろ? ケンカ売つているのが自分の父親よりも地位が高く権力もあるのを知らないとは、本当に滑稽だ。久しぶりに見

「でもこの手合いは救い様がないな。一体、コレのドアで、穩便に済ませてやる必要があるんだ?」

呆れかえつた透る美声に、はつとなつてその方向を見ると……東屋の柱に背を預けて、冷やかに見詰める少年がいた。

卷之二

私の口から思はず声が漏れた。

風に靡く銀茶色の髪から見える幻想的な紫の瞳が射抜く。整った顔立ちが、皮肉気にこの状況を見て口元に笑みを浮かべている。

少年ほさを残しつつも、大人ひでいる綺麗な美形顔や、あからさまに醸し出る雰囲気が上流階級の人間だと言外に現わしていた。

現・宰相の息子にして、当代女王陛下の甥つ子、ラグナリア星皇家の第2皇位継承者で、ついこの間私の婚約者になつたカグラ・ジーノ・ラグナその人じやないのよおおおおー！

ダッシュで逃げたい。

そう思つてもいいよね？

何故に遠攻で遭遇しなくてもいいぢやない。

あああああ
とこよ

ナツキ本人だつて事が、バレませんように！！

私は心の中で、神様に願つた。

無理矢理に首を突っ込むのはハタ迷惑です。

「あ～あ～、王子が来ちゃった」
心底嫌そうにシエンが言つた。

「王子はヤメロと言つていいだろ?」「
同じ様にカグラもまた心底嫌そうにシエンに言つ。

「カグラ、部屋で待つていてくれと言つたのに何故来たんだ?」
レーツェルは、カグラの許へ近寄つた。

前にも聞いたやり取りをする一人を、あつさり無視スルして会話をぶつた切る勇者がここにいた。

「グラニットを失脚させるのに好都合なネタを横取りされるのが解つていて、どうして俺が待たなくてはいけないんだ?」
にやりと笑うカグラ。

「根に持つてるわね~、ホント」「
だな」

シエンの言葉に、頷くレーツェル。

「カグラが来ちゃつたし、寮監室で尋問する必要が無くなつてしまつたわね」

シエンは面倒臭そつこ、ぼやきながら視線をお祖父様へと移し。

「どうしますか?」
と、問い合わせた。

「では、僭越ながら本館の会議室はどうでしょう?」
お祖父様の口調は穏やかなのに、何故か冷つとした。

「じゃ、アタシ達は先に行くわね
視線をパームへと戻し、命令口調でシエンは告げる。

「貴方は本館へ行つてもらいます。拒否権はありません。現時点を持つて、パーム・グラーツには違法行為の重要な参考人として来て貰います」

シエンの言葉に、パームは目を見開き愕然としていた。

「……なぜ?」

「貴方の入学が不正の可能性があります。先ほどの行動などに於いて、当学院に相応しく無く、よつて今回の件も合わせて尋問します。抵抗されるのならしても構いませんが、その時は強制的に隔離輸送をします。どうしますか?」

「…………っ」

真っ青な顔になつて、パームは震えて突つ立つていた。

「さあ、来なさい」

シエンはパームの右腕を掴み、容赦なく連れて行く。

その姿を私は、呆然と見詰めていた。

「お嬢さん、儂も彼に先ほどの詳細を教えないといけないので失礼します。変な事に巻き込んでしまつて申し訳ない。嫌わずにこの庭に通つて来てくれるといい」

お祖父様が困つた様にお詫びを言つ。その姿は何故か捨てられた小動物を思わせる。

私が来ないと確実にいじけるね、これは。

傍目には、ただのそこら（？）の老人と学生の交流だとしても……お祖父様にとつては会う機会が少なかつた大事な孫娘（今は中性体だが）との交流だ。

そんなのを奪つた日には、壮絶にいじけて拗ねまくるだろう。お祖父様が欲しい言葉はただ一つ。

「はい、勿論です。喜んでお庭の方を散策させて貰いますね」笑顔で返事を返すと、お祖父様は嬉しそうに笑つて。

「有難う。ゆっくりして行つて下さいね」
ペコりと軽く会釈をして、シエングが消えて行つた方へと進んでいく。

凄まじい茶番劇だが、誰かが見ているとも限らないのでフリは必要だ。

この目の前にいる一人にも言えることだけね。

バレてるのかいないのか、見当がつかない。

シエングは論外だろう。彼は『見える』人なのだから隠しても意味はない。

私に一切触れなかつたのは、その様にするのだと言つポーズでもあるのが理解出来た。

さてこの窮地をどう切り抜けようかな……。

「一人はイト」。

「君も大変だつたね」

にこりと人懐っこい笑顔を浮かべて、レーツェルが言った。

二人はゆつたりと歩いて来て、レーツェルは笑顔を振り撒く。片割れば、無表情。

何だ、この見事なまでの対比は。

カグラは笑顔の安売りはしないらしい。

昔、お目に掛つたのはリア度高かつたのね。

あれ？

キラキラ光る陽光の中で、並ぶ二人に違和感を見出す。光の光彩で、髪の色が同じ様に見える。

そして、顔付も似ている。

などと不謹慎な事をぼんやり考えつつ、レーツェルに言葉を返す。

「あ、いえ、大丈夫です。庭師のお爺さんに」迷惑が掛つてしまつたらつて……」

「ああ！ あの人の方は大丈夫だよ。殆どの学生が知つてゐる事だけど、学院や寮にいる全ての職員は学生の動向を見守るのもお仕事だつて話だから気にしないで良いと思つよ。あれも仕事の内だらうから」

「そうなんですか、解りました」

シエモンがお祖父様に話しかけた理由に、しつかりと合点がいつてほつとした。

「ねえ、君の名前はなんていうの？」

ニツコリ笑顔で、私にレーツェルが問い合わせた。

「あ、はい。私は、ナツキ・タカマガハラです。今日、入寮した新人生です。どうぞ宜しくお願ひ致します」

深々とお辞儀をして、挨拶をする。

一応、同名だし、なんか変な事言われないかな？
ドキドキして、心臓に悪い。

「ナツキちゃんって言つのか～。ふう～ん、カグラの婚約者と同じ名前だね～」

レーツェルのこ～やかな瞳は、笑つているのかどうか微妙な感じで地味に心臓に悪い。

「あ、はあ、そなんですか？　あ、あと、すみませんが、ちゃんと付けは～」遠慮願いたいのですけど……私、未分化なんで……変化した時までちゃんと付けされるのはちょっと嫌なので」

そんな婚約者なぞの知らない風に装いつつ、私はちゃんと付けを拒む。

首を少し傾げて、レーツェルは私に言つ。

「あれ？　わつき、庭師の人はお嬢さんって言つてなかつたつけ？」

「急いで居たよ～ですしき、あまり未分化の事は言いたくないので…」

俯いて誤魔化しながら視線を花々に移すと、そこではソードが花にじやれ付いていた。

…

普通だつたら、微笑ましい光景なんだけどね～。

今は緊迫的な状況のはずよねえ？

あえてソードは、ニヤンコらしく振舞つているのか……？

それとも単純に飽きたのか？

後で問い合わせよう。

「ま、言いたくない事や言われたくない事の一つや二つ、誰にだつてあるだろうよ。追求するのは無粋だと俺は思うけどな」顔を上げると、カグラがトンとレーツェルの肩を叩く。

「それもそうか。ごめんね、嫌な事聞いたやつで。許してくれるかな？」

ふわりと微笑みを浮かべて、レーツェルは私に言つ。

なに！？ この輝くような笑顔！！
は、鼻血出そう。

あ！ あれれれ！？

その笑顔、昔見た事がある！

そう、拉致騒ぎの時のカグラの笑顔に似ているんだ！
訊いても良いよね？ それ位。

私に色々訊いたんだから、反対に訊いたつてお相子だよね、うん。

「あ、はい。その代わり一つだけ質問しても良いですか？」

「うん、いいよ」

「あの、お二人似ているって言われませんか？」

私の言葉に一人は顔を見合せた。

レーツェルが少し苦笑しながら言つ。

「あー、やっぱり似ているかな？」

「は、はい。陽光で髪の色が透かされて、並ばれるとあれ？って思

う位には似てるかと」

「そつかあ。なんか嬉しいな」
レーツェルは朗らかに応える。

「嬉しいのか？ そんなもんが」
微妙に嫌な顔をするカグラに、レーツェルは少しみつとした表情
をする。

「嬉しいよー。ちゃんと従兄弟なんだって思えるからね」

「へ？ 徒兄弟？」

「そうだよー。僕の父とカグラの母親が兄妹なんだ。叔母上なんて
呼んだら殺されかねないけどね～」
あははとレーツェルは笑う。

殺されかねないって……どんな方なの！？
まあ、いつでも乙女で居たいのは女として理解出来るし、自分で
もそう呼ばせてもおかしくないかもしねりないけども。
万が一カグラと結婚になつたら、お義母様になるのだから情報は
あつても損はないか。
この人に惚れたらだけどね。

一応、前世込みでの精神年齢的には私が上になるから、余計冷静
に物事を見ちゃうのだけど……。
まあ、母様は私が本気で嫌がつたら婚約話を無しにしてしまいそ
うだ。

どちらかと言つて、私を守る為に企んだ婚約何だつて事も理解し
ている。

向こうにも五月蠅い令嬢との見合いを捻じ込んで来る輩をかわした
い思惑もあると思う。
でなければ、私の顔や私自身が表舞台に立たなくても良いなんて

話ないしね。

一度、会つただけの子をどう思つていいんだろうか、この人は。

そつと、私はカグラを盗み見た。

二人はイトコ。（後書き）

あれ？ レーツェル君が何か軽い人になっちゃいました。
クール系のはずだったんだけどなあ。
ま、いつか。（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7531s/>

Our place

2011年12月1日19時49分発行